
アメジスト

しらせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメジスト

【ΖΖコード】

Ζ4Ζ10Ζ

【作者名】

じりせ

【あらすじ】

樂して生きることがすべてなアメジは100年の時を越えて巨大破壊生物「黒水晶」と戦う。異世界少女アクション。チベット密教文化からインスピレーションを得た世界観。サイト掲載作品を手直しつつのHPです。2006/02/18完結済。全70話。

第1話

「おのれーおのれモンドめーー。大地の底から呪つてやるーー
つ。」

冷たい石の棺の中、少女はうなり声を上げていた。

なぜ、自分はここにいるのか、考える余裕すらなかった。

怒りにまかせて、自分の最期を実にくだらない理由で決めてしまった。

「あたしと結婚するつて約束したじやん。ガキの口ばかり、ずっと
前から交わした約束をつ」

少女が怒っているのは失恋？　いや、少し違う…。

「やぶるかー？その口ひつ、自分が族長になる、その口ひつ。族長
の妻の座つ、あたしの夢つ！」

夢、自分の夢を無にしてされた事に対する怒りと…

「あんな大勢の前でだつ、あたしゃ、ちょーはしゃいで、とんだ赤
つ恥だつての。よつによつて、同じ巫女のシルバと、あんな地味な
女と…」

プライド、プライドを傷つけられた事に対する怒り。

なぜ彼女はこんな棺の中にいるのか、だ。
それは、彼女の夢が破れた直後の事…。

「アメジよ、水晶の聖乙女、やつてみる気はないか?」

白い髪を肩まで伸ばした初老の男は少女に問いかけた。

アメジと呼ばれた少女は、大地に寝転がつたまま、答えた。

「トパーーズ様。なに? それ。あたし面倒臭い修行ヤだからね」「ふてぶてしく答える少女、しかしこいつもの事なのだろうか、そのトパーーズと呼ばれた男は態度を変えず、続けた。

「水晶の聖乙女は大地の底から、このリスタルの民と大地の為に、ただ祈り続ける。

これはアメジ、巫女としてろくに修行をしておらんお前でも、立派にこなせる役目だぞ。どうだ?」

「それって、確かに生き埋めになるつてやつじやない? ジョーダン! あたしには夢があるの、そんなくだらない事、やるわけないじやん。」

「そうだな…。ま、無理にとは言わん。だが私も大神官として、お前を巫女として育てねばならん。それにお前の父にお前を一人前に育てあげると約束したからな。」

「オヤジのことはいいじやん。勝手に遺跡の研究とかで、山の遺跡で死んじゃった奴の事は。」

アメジの父はどうやら放任主義だったようだ。自分の意思を縛られるのが嫌で、趣味であり、生きがいであった古代の遺跡やら、このリストアル独自の特殊なチカラ、この地の民は「水晶」と呼ぶそれを研究していた。

それは生あるモノの中にある氣の流れ、人間をはじめ、この世の生

物はこの大地から、流れてくる気によつて、エネルギーを得ている、といつ。中国でいう氣孔のようなものだらうか、そのチカラを水晶と呼ぶのだと。

「お前はほんとにオルドに似てゐる。いいとこも、悪いとこも。「げつ、やめてよ、トパーズ様つ。あんなのと似てるなんてーつ、嘘でも言わんといでーつ。」

「ハハハ。」

「そろそろ広場まで行かないと。ほら、今日はモンドのつ。」

「ああ、そうか。あやつもついに族長に就くのか、お前以上に心配な奴だからな。」

「だから、トパーズ様がしつかりサポートしてやつてよ。あたしだつて楽できるしー。」

「ん、アメジ、どういう事だ?」

ここリスタルは、北は山脈、南は草木も無い砂漠に囲まれた、山岳地帯にある集落である。厳しい環境の為か、外からも内からも人や生物の移動は無く、陸の孤島と化していた。

唯一の集落、リスタルの民が住むこの街の中心にある広場に、アメジは走つていった。

今日はあるイベントが開かれる。モンドの族長就任の式だ。

モンドは族長の息子であり、アメジとは従兄妹であつた。モンドはアメジに負けず劣らずの、ダメ人間だつた。

アメジと交わした結婚の約束も、族長になれば、周りが世話をやしてくれると思い込み、お互い樂したいがための約束だつた。

アメジは息を切らしながら、広場の人の波をかきわけながら、台の上で挨拶を始めるモンドへと近づいていった。

「モンドっ。」と、小さくアピールするが、彼の視線はまったく別のほうへ向けられていた。

「みんなー、あと今日は、オレの花嫁となる人も紹介するー。」台の上でだらしなく揺れながら、へらへらとテしながら、彼はその花嫁の名を呼んだ。

「そう、その花嫁は、あたしつつ！」

モンドが話す前にアメジが叫んだ。

「ええっ、アメジ？ おいモンド、マジかよ？」 「あのケツでか女だぞ。」

周りの若者たちが野次を飛ばす。

「うつさいんじゃいつ、カス共！ 前から決まってた事なの！ ね、モンド。」

「い、いやアメジ…、オレの花嫁は…。」アメジから目を逸らしながら、モンドは言った。

「シルバだつつ。」

「…はあつ？」

モンドは隣にシルバという少女を呼んだ。

頬を染め、目を伏せながら少女はモンドの傍へと駆け寄った。えへへと、照れながら寄り添う一人には祝福の声が上がる。

逆にアメジには「バッカじやねーの、こいつ。」「とんだ勘違い女だよ。」

馬鹿にされている。

激しく馬鹿に……。怒りがこみ上げ震えだすアメジ。

「「」「」ぬるよー、アメジ。ぬれたりぬつてたんだけじゃ、タイミングがや。」

いいわけモンド、しかし、今こそ最悪のタイミングではなかろうか。キツとモンドを睨みつけるアメジ。殴られると感じたモンドは反射的に身構えてしまつた。しかし、アメジは鬼の形相のまま、広場から走り去つたのだ。

夢破れし、アメジの思考はぶち壊れていた。

アメジが向かつたのは、街の外の山道。その先には、古代の遺跡の一つ、「水晶神殿」、岩壁を削られ造られてある。

そこには、トパーズと巫女の少女がいた。

「じつしたアメジ、用なら後にしる。」これから【水晶の聖乙女】の儀式をせねば…」

「まつて、ソレ、あたし、やる。」

「ええつ？！」

何があつた、と聞くトパーズには答えず、石の棺へと勝手に入つていぐアメジ。

「立派な聖乙女になります、とモンド」「ぬえてください。」

夢叶わぬこの世に未練などなく、あの世から呪いを放つ道を選んだ。そして、いつのまにか、眠りについていたのだった、モンドめ、とつぶやきながら…。

あれから何時間眠っていたか、まぶたに光を感じアメジは起こされた。

トパーーズ様？いやちがう。若い男。反射的にアメジは飛び起きた。

「モン…」叫びかけたアメジより早く、その男は語りかけた。

「あなたが、水晶の聖乙女殿。」

「え。」

目の前にいる彼はアメジのまったく知らない男だった。

「だれよ？ あんた…。」

「私はリストルの族長を務める、ジストと申します。」

（なに言つてんの、こいつ、族長はモンドがなつたばっかじや…？）

この出来ごとアメジの樂して生きる夢を遠ざけることとなってしまった。

第2話

「ジストー、もう、止めるたるよー。」

「タル。この石棺で最後だ、もう少し待つてくれ。」

冷たく静かな水晶神殿に、一つの人影と一つの小さな影があつた。

この遺跡には、百年前まで行われていたといつある儀式にその身を捧げた少女たちの亡骸が納められていた。

標高の高い、このリスタルの地の、ここはさらに天に近い場所である為、神殿内に時たま、冷たい風が流れこんでくる。

青年に付き添ってきた小さな生物は風によつて、毛を膨らませられ、寒さに震えていた。

青年は最後の石棺に手をかける。

「どうせまた骨たるよー。もう骸骨はイヤたるー。」

どうやら他の石棺は、すべてこの青年が開けたようだ。石棺の中にいた少女達は、皆骸と化していた。なぜ、彼はこんな事をしているのか…。

「フンッ」青年は石の蓋を持ち上げようと力を籠める。

しかし、いくら大の男であれ、一人で持ち上げられる重さではない。だが、蓋はゆっくりと動きだした。

彼は体内の水晶（このリスタル独自の気の使い方）を自在に操れる

「水晶使い」だった。

手のひらが、ポウと光りながら、さらに力が高まっていく。その数秒後、蓋はみごと外れたのだ。

「ああっ、どーせまた骨骨たるつ。だいたい百年前の人間が生きてるわけないたる。」

「タル…見る…」

「生きてたらそいつバケモンたる。そいつこそ黒水晶たるよつ。」

「タル、生きてるぞ、彼女だ…。ラルド様の言つた通りだ」

「へ、ええつ？」

その石棺の中には、今にも目覚めそうな少女の姿があつた。興奮を抑えながら、青年は少女へと近づく。

「んんっ。」少女の目蓋がぎゅっと動いた。「あつ…」

少女が目を覚まし、彼と目が合つた。

「あなたが水晶の聖乙女殿」

彼はそう語りかけた。わけもわからぬ顔で彼を見返す少女とは対照的に、青年の顔は、輝きに満ちていた。

アメジ、フリーズ状態

大地の底から呪つてやる、と。「水晶の聖乙女」をやるとこいだした自分。

自分をフツたモンドに対して、石棺の中でどかどかと怒つていたのは何時間ほどか…？

気がつきや目の前に見ず知らずの男。しかも、言つてる事意味不明！

とりあえず、深呼吸、でもう一度、男に問いかける。

「で、あんた、誰？」

「ですから私は、現在族長を務める・・・」

「へ？モンド、もう面倒臭くなつて、族長辞めたのか？」

「モンドとは？」

二人の問答をイライラと聞きながらもう一つの口が開いた。

「ジスト、こいつダメっぽいたるよ。きっと、百年も眠つてボケたに決まつてたる。使えないたるよ。」

生意氣に話す小さな生物を見て、アメジは驚いた。

「ブツ、ちょっと、こいつまさか聖獣？」と、なぜかふきだすアメジにジストが「そうだ」と答えた。

「タルは私の良きパートナーです。」

彼らが聖獣と呼ぶその哺乳類は、このリスタルの地に、リスタルの民が移住していくずっと昔から、ここに住んでいた。

彼らは、人と共存する道を選び、言葉を理解し、話せるまでになつた。

彼らも、水晶のチカラをその身に秘めており、ジストのよつな「水晶使い」と組んで、共に過ぐしている。

「あたしが知つてゐる聖獣のプラチナは、もつとスラつとしてて、足も顔もスッキリしてて……」

「プラチナ知つてるたるか？タルのご先祖様たるつ。」

「は？ご先祖？何言つてんの、まだ現役よつ。だいたいアンタみたいなブツサイクな聖獣見たことないわよ。」

「ぶつちーーっ。ブチキレたるーーっ！」

次の瞬間、アメジが激しくブツ飛んだ。タルの飛び蹴りが炸裂したのだ。

「ど」ああーーっ。

変な悲鳴を上げ、凄まじい格好で、アメジはすつ転んだ。

「コラっ、なんてことしてんだ、タルっ。」

ジストがひょいと、タルを抱き上げた。

「だつてー、ジストー、こいつがタルのことバカにしたたるからー。」

「だつてさ、ほんとにブツサイクなんだもん。こんなモチみたいにぺつたんこな顔でさー。」

アメジが、ムクリと起き上がつた。

「いいか、タル。私達は、聖乙女殿にお力を借りにきたんだぞ。」

「？」（あたしの力を借りに来た？ビーウーーいつちや？）

「うう、でもでも、タルとジストでがんばれば、黒水晶なんて倒せるたるつ。」

「それができないからこーしているんだろ？水晶使いと聖獣だけでは、黒水晶とまともに戦えない。」

「黒水晶……」アメジはその名に聞き覚えがあつた。

（でも、それって確か、あたしが生まれる前に絶滅したって聞いたけど…）

「黒水晶と戦うには、私とタルだけではダメだ。巫女のサポートが必要だらう。」

「巫女ならサファアがいるたるー」

「サファアは、まだ前の戦闘での疲れが癒えてない。今では巫女も彼女一人になってしまったからな。」

黒水晶と戦う？

やっぱリアメジには、この一人の会話は理解不能だつた。

黒水晶は知っている。この田で生きているところは見たことは無いが。

以前アメジの父「オルド」が亡くなつた後、葬式で初めて知り合つたモンドと一緒に、父オルドがよく通つていた山脈にある遺跡をと巡つたりしていた。

その山道の途中、何度か目にした、巨大な生物の化石。

このリスターに、昔からいたといわれ「黒水晶」と呼ばれている。見た目は鳥類のようで、はるか昔に滅んだ恐竜にも似てる。

その体は巨大で3Mから10Mはあるといわれた。さらに、凶暴で人を喰らい、その体内には毒を宿し吐く息だけでも、生物を死に追

いやつたといつ。

全身ドス黒く、田も不気味に黒くギラギラと輝き、大きなその体には、桁外れな水晶を秘めていた。そのことから、人々はその怪物を黒水晶と呼び、恐れたのだ。

しかし、リスターの民は、実に好戦的な民族で、恐れるだけではなく、戦う道を選んだのだった。

その戦いの歴史は、リスターの民がこの地に移住してきた、千年も昔から続いていた。

人は、聖獣と力を合わせ、たくさんの犠牲を出しながらも生きぬいてきたのだ。

その戦いも、アメジが生まれる少し前、アメジの父オルドや、その弟でありモンドの父の二人が中心となり、黒水晶を絶滅させ、長い黒水晶との戦いの歴史に幕を下ろしたのだった。

(やがて、黒水晶つて、とつぐの昔に滅んでんじやん。なのに、こいつらの言つてる事つて…。)

「とりあえず、街に戻つてラルド様に報告しよ。黒水晶がこの辺りに戻つてくるまえに。

さ、聖乙女殿。私と一緒にきてください。詳しくは、向いひでお話します。」

混乱ぎみのアメジに、ジストが優しく手を差し出す。タルはまだ不满げだが。

(よくわかんないけど、こいつが族長ならあたしの夢もまだ、終わっちゃいないよね？
ふふふ、ってかモンドより断然いい男だし。)

怪しい笑みを浮かべるアメジに、タルがピクリと反応する。
アメジは未だ自分が百年先の未来にいる事に気づいてはいなかつた。
そして、この直後に出会い、最悪の出来事にも……。

第3話

「聖乙女殿、足元に気をつけてください」

「おおひ、どうも…」

ジストに導かれ、アメジは水晶神殿を出る。そのジストの隣をブツクサと不満気なタルが歩く。

アメジ、この面倒くさがりな女の瞳は希望に満ちていた。

「夢は終わってないぜっ！」

「え、なにか言いました？」

「ねえ、アンタさ、もしかして結婚してる？」

「え、いいえ。まだですが…」

「よっしゃーーっ！」とアメジがガツツボーズをとった瞬間、タルの飛び蹴りがまたも炸裂した。

「いつてーーっ。またやりやがったなー、モチ聖獣ーっ。」

「お前っ、今ジストのことやらちー目で見てたたるよっ。」

「こんの一ーど、もみ合いそうな一人をジストが止める。

神殿を出てからも、アメジとタルは、フーっと睨み合っていた。

土と石だらけの、このリストアルの山道を下りながら、眼下に映るは、リストアルの街。

世界から隔離されたこの地は、百年の歳月を経ようが、大きく変わることはなく、アメジのいたあの頃と、ほぼ同じに見えた。

そり、遠田からは。この時、アメジは違和感を感じる」とはなかつたが……。

その直後、その気持ちは吹き飛ぶことになる。

「……」

その異常に真っ先に気づいたのはジストだった。

「タルフ！」

自分のパートナーを傍へ呼ぶ。その声にタルも状況を理解し、すぐにジストの傍へと駆けた。
アメジだけはなにも理解しておらず、え？え？となるだけだった。
だが、ただならぬ事態だとすぐにわかった。

まだ日中だというのに、アメジ達の上は真っ黒な影に覆われた。
見上げると、そこには巨大な怪物がアメジ達を見据えていた。

「黒水晶……」

「なつ、なんだーっ？！このバケモンはーっつ！！」

慌てふためくアメジとは対照的に、ジストは冷静にそのバケモノを見ていた。

「思っていたより早く戻ってきたな。」

「案外この女の水晶に呼ばれてやつてきたのかもたるよ。」

(もしかして、これが黒水晶？ええっ、でもなんで？急にこんな
が現れんのさつ？ そしてなんでこいつらは冷静なんだよ？まさか、
ドッキリなのか？)

黒水晶は三人を確認すると巨大な口をさらに広げて、襲いかかつて
きた。

うつそーん。と立ち去っていたアメジはジストに抱きかかえられ、

そこから下二メートルへと飛び降りた。

タルも同時に続く。

その素早い判断と行動で、少し余裕の時間ができた。あっけにとら
れているアメジにジストが訊ねた。

「聖乙女殿、ドクロ水晶は？」

「は？ ドクロ水晶？」

「ジスト、こいつ持つてないたるよ。」

「え…。」

ジストは、本当に持つてないのか訊ねた。

アメジはなにソレ？ とわけのわからない顔をしていた。
本当になにも持つてなかつたのだ。

それを知つたジストはさつきのクールな表情からがっかりした顔にな
つた。タルは「やつぱり」とため息をついた。

「巫女の力無しでは、黒水晶へ攻撃が届かないからな…」

「こいつ巫女のくせに、ドクロ水晶持つて無いなんて、一セモンた
るよつ。」

（なんなのよ、ドクロ水晶つて？

ん…、そういうえば以前、トパーーズ様がちゃんと修行すればそれの扱
い方を教えてくれるつて、見せてもらつたおぼえが…。

そう確か、透明なドクロをかたどつた石で、手のひらに乗るサイズ
の…。

それに水晶をこめるとかなんとか。）
とアメジがのんびり考えてこるついで、黒水晶は田の前にまでや
ってきた。

「どわわわあーーっ！」 とまたも慌てふためくアメジとは反対に、

ジストとタルはクールでいた。

「しかたない。気をそらすことくらいしかできないが、タル。私たちだけでいくぞ。」

「わかつたる。」

「いいか、タル。今日は戦いをしにきたのではない。聖乙女殿を無事、ラルド様の元までお連れすることだ。」

そう言うと、ジストはアメジに街のほうまで走るようにいった。半分パニクリながらも、アメジは頷いた。

黒水晶はまたも巨大な口を広げながら襲いかかってきた。

アメジは駆け出し、ジストは自らの水晶を高め、それを右手へと集め、激しく輝きだしたその右手に集まつた水晶を、聖獣タルへと向けて放つ。

水晶使いジストの水晶によつて、さらに大きな水晶をその体に宿したタルは、輝く光の生物兵器と化す。

光の兵器となつたタルは光のごときスピードで、空へと駆ける。

そして直線的な動きで黒水晶へと向かつた。

しかし、黒水晶は、それを簡単にかわした。

ジストもタルもそつなることはわかつていた。

聖獣は水晶使いに水晶を注ぎ込まれることにより、戦いの力を得る。それにより強力な光の兵器となるが、その状態の聖獣は、ほとんどの感覚（視覚、聴覚など）を閉じ、攻撃へとまわすため、自分の進む道すらわからなくなり、直線的な動きしかできないのだ。

その上黒水晶は、直線上の動きに強く、その行動を見切られる可能性が非常に高いのだ。

それをサポートできるのが、リストルでは巫女と呼ばれる、女の水晶使いなのだ。

「ひい、ひい……」

アメジはひたすら駆けていた。

とはいえここは山道下り道。おもわず転がりそうになり、アメジは転ぶ直前、下の道まで飛び降りた。
ダメ人間といわれてきたアメジだが、運動神経はなぜかよかつた。

ふう。と一息ついたアメジは上のほうにいるジスト達を見た。

「あいつら、大丈夫なのか？黒水晶と戦うなんて、だいたい滅んだんじやなかつたの？ オヤジ達の代で終わつたつて聞いてたのに。」

黒水晶が絶滅した後、対黒水晶の為の職業だった水晶使いと巫女は、祭りが主な仕事となつていたのだつた。

巫女は踊りを舞い、水晶使いは曲を奏である。

アメジたちが行つていた修行も黒水晶と戦わなければ無意味なもののがほとんどであつたが、それはもう儀式と化していた。

「はあー。とにかく街に戻ないと。トパーズ様ならなにか知つてるかもね。」

アメジは飛び降りながら、山を下り、街をめざしていた。

街を目前にし、あの声が聞こえた。

「聖乙女殿っ。」

ジストとタルが駆けつけた。

あの直後、黒水晶はなにかに呼ばれたよう、「ギヤアアア」と鳴いたかとおもうと、突然羽ばたき、山脈の向こうへと飛んでいった

のだった。

「では、聖乙女殿。」案内します。」

(案内つて、あたしゃここの生まれなんだけど…。しかし、この男バカ丁寧な奴だな。)

「てゆーか、その聖乙女殿でのやめてよね。あたしは……」

(ほんとに望んでなったわけじゃないし、ヤケおこしただけだもん。)

「では、なんとお呼びすれば…？」

「アメジ。アメジでいいわよ。アンタは、ジストていつたつけ？」

「アメジ…」

「そつ…よろしくね、ジスト」

そう言つてジストへと歩み寄るアメジに、「近づくなー」と、タルがどかつとぶつかる。

山道から街へと入る。山岳地帯にあるコスタルは、街も山に沿い、段々状に建物が立ち並ぶ。

ゆえに、街は階段だらけであった。

アメジ達が街へ入ると、たくさんの人が三人を迎えた。
しかもえらい歓迎ぶり、「この方があの……？」と皆珍しそうにアメジを見ていた。

ジストには「族長、おかえりなさい。」の声がかかる。アメジにとつては異常な光景だった。

いつもバカにされてばかりだったアメジにとって、こんな歓迎をうけるのは初めてだったのだ。その時、アメジは少し違和感を感じた。だれ一人として、知った顔がないのだ。あと、街の様子もどこか違う気がした。あとでトパーズ様に会いにいこうなどとアメジが考えていると、人ごみの中からジストの名を呼びながら、アメジと同じ年頃の少女が現れた。彼女はジストの姿を確認すると、うれしそうな表情で彼の傍へと駆け寄った。

「ジスト様っ！」

「サファ」

「サファ」

サファと呼ばれた少女は潤んだ瞳でジストを見上げた。この雰囲気からして、二人は恋仲なのでは、とアメジは悟った。確かにいい男がそうそうフリーではない。

「マジ？」

早くもアメジの夢は崩れ去るのだった。

「ジスト様、おかえりなさい。」

「ああ、サファ。ただいま。」

さわやかに挨拶をかわす男女を隣に、アメジは一人落ち込んでいた。

夢は終わった、と。

「それより、まだ動き回らないほうが多いんじゃないかな？ケガも完治しないだろ？」

「ええ、でも心配だったから…。」

あ、ジスト様、…そちらの方がもしかして…」

とサファはアメジを見た。そしてジストがサファにアメジを紹介する。

「ああ、そなんだ。ラルド様は正しかったよ。
彼女が水晶の聖乙女、アメジ殿だ。」

と、ジストがおおげさに紹介すると、サファはもぢりん、周囲の者たちも「おおっ。」と驚いた。

それに気づいたアメジは「んっ」と少し変な顔をしていた。

「おじい様も喜ぶわ。すぐに知らせましょ。」

とサファが後ろを振り返った瞬間、すさまじい声が響きながら、こつちへと近づいてきた。

その声は人ごみを跳ね除けながら、アメジの目の前で止まった。

「おおおっ。族長、そちらの方が聖乙女殿じゃなあっ。」

その声の主は、つるり、と頭のはげ上がった、歳は七十を迎えたばかりの男であった。

「ええ、ラルド様のおっしゃった通り、水晶神殿に…」

とジストが説明をしているが、その男はほとんどそれを耳に入れておらず、舐めるような目でアメジをジロジロと見ていた。その目線は顔よりも、胸元そして下半身、特に尻をしつゝに見ていた。

「ちよっとー、このジジイだれよつ？」

アメジは露骨に嫌な顔をしながら、一歩後ろへ下がった。

そんなアメジの心中も察せず、ラルドは一タ一タしていた。

「アメジ殿。こちらは大神官のラルド様です。」

「大神官？ なに、このジジイが？」トバーズ様は？ とアメジが問いかける間もなく、ラルドが激しく接近。満面の笑みで迫った。

「おおっ、アメジ殿っ！ いやー、ワシの理想どつづじゃ。」

ワシの理想どつづのいい尻じゅー。

このラルドとの出会いがアメジに激しい戦いの道をもたらすことになるのだった。

「よーし、祭りじゅ、祭りじゅー。早速始めるぞい。」

ラルドが手を叩きながら言つた。周りの者もわー。と盛り上がつた。

「ちょ、ラルド様。祭りつて…」

族長なのに状況をまったく理解していないジストを無視し、ラルドはアメジの手を掴んだ。

「でつ。なにすんじゅいつ、このエロジジイがつつ。」

アメジの拳がラルドの顔にめり込んだ、がラルドはすぐに復活し、またアメジの手を掴むと一直線に駆け出した。

ぎやーーー。と叫ぶアメジの姿が遠くなるのを、ジスト達はため息ながらに見送つた。

ラルドに連れられながらアメジはリスターの街を見た。やはり違和感をおぼえた。

ラルドが向かつた先は、水晶使い達の修行を行う場でもあり、大神官の居住地もある、街の中央にある広場前の寺院であつた。そこは、百年前とほぼ変わらず、屋根からはこのリスターで信仰されている太陽神と、その神の下僕とされる四の精霊が鮮やかに描かれたタンカが掛けられていた。

寺院からは香がただよつてくる。中はただっぴりい中央に太陽神のどでかい像が座っている。アメジにも見覚えのある場所だ。

ただ、あの人がいない……。

「さわー、アメジ殿。中へ……」

「ねえ、トパーズ様はどこよ?」とアメジがキヨロキヨロと見回していた。

「おお、トパーズ殿といえば、アメジ殿の時代の大神官ですね。」

「……。ジイさん。のーみそ大丈夫か?」

「アメジ殿、もしやまだ混乱されどるのかな? ま、無理もないかのう、百年も眠つておつたらの。」

ふいーとため息まじりにラルドが同情した。アメジはまだ気づかない。

「あたし、何日寝てた? 一週間とか? その間にトパーズ様辞めちゃったとか……」

おそるおそるラルドに尋ねた。その問いにラルドは笑顔で答えた。

「アメジ殿、ナイスギャグじゃね。百年ですか。いやー、ワシより
ずっと年上ですわ。」

「…ほんと、大丈夫か、アンタ…」

「アメジ殿、まだ信じられませんかの。ほれ、後ろを！」覗なされ。

ラルドはアメジの後ろの壁を指す。

そこには、歴代大神官の名が記されていた。一番端の新しい所に、
ラルドの名を確認できた。

じゃあ、このジジイが今の大神官？とアメジも信じざるをえなかつ
た。

そして、トバーズの名を探した。ラルドをずっとしかのぼって、そ
の名を見つけた。

(え、どーゆーこと？ なんでこんな前にトバーズ様の名前が？
百年だ？ あたしまつたく老けとらんぞ、あたしが眠つている間な
にがあつたのよ？)

「理解できたかの？ ワシも大神官として、古代の書物やら解読し
ておつてのう。」

アメジ殿のことはこの書に載つておつてのう。」

とラルドが取り出した古びた本をアメジがバツ、と取つた。そこには、水晶の聖乙女のことが記されており、黒水晶からリスターを救
つてくれる救世主となる、などと無責任なことが書かれていた。
せうにアメジが驚いたのは、その著者だった。

「オルド……？」

アメジの父オルドの著。

理解不能だった。アメジが巫女になる前に死んだ父が、アメジが聖
乙女になることなどわかるはずもないのに…と。

「何だー、これ、ビーチーひつねーへ」

「オルド殿はたしか、アメジ殿のお父上ですね。ちゃんと調べてお
りますぞ。」

そのオルド著の本にはたしかに、アメジの名が記されていた。水晶の聖乙女になるということも。そして、尻がでかいといひどつでもいいことも書かれていた。

「ソニーはほんとに百年先のリストタル?」

さらに、アメジが百年後に目覚め、黒水晶の脅威にさらされているこの時代の救世主となる、などと恐ろしげなことも書かれていた。

「うそだ。オヤジがあたしが聖乙女になるなんてわかるわけないじ
ゃん。オヤジの名を騙つただれかのいやがらせ?

ちよつと待て、フジーに百年もこのままでしるなんて無理でしょ？みんなしてあたしをからかい楽しんでる。

そういうアメジにラルドは彼女の尻を撫でながら答えた。

越えて現代へとたどり着いた

そう云ふおり、アラシ鷦鷯には特別な力がある。このリストタルを救う、救世主なんじやよ。

アメジにぶつ飛ばされながらも、ラルドは笑顔でしゃべっていた。
アメジは立ち尽くしながらも冷静に考えてみた。

これが水晶の聖乙女の力？百年の時をも越える、巨大な水晶でも身につけたというのか？

街の姿もあの頃となんだか違う。知った顔が一人としていない。族長も大神官も、モンドとトパーズでなく、ジストとラルド。このじいさんの言うことが真実ならつじつまがあう。そこでアメジは気づいた。

「じゃー、ジストはモンドの……」

子孫、であることに。

「おおっ、アメジ殿は族長の先祖と顔見知りじゃつたのか。」

「ああ、そうだ。あたしゃーあいつのせいで赤つ恥を——」

忘れかけてた怒りがふつふつとよみがえってきた。

段々と赤くなるアメジの顔もラルドの次の言葉で色がひいた。

「アメジ殿は最後の水晶の聖乙女じやからの。」

「へ？ 最後？」

「おお。長年続いた聖乙女制度もアメジ殿で終わつとるんじや。ト
パーズ殿が廃止したらしいんじや。」

(トパーズ様が……なんで……?)

その真意は今のアメジにはわからなかつた。

「さて、そんな難しい話は後ににおいて、祭りじや、祭り。
アメジ殿を歓迎する祭りを行うんじやよ。」

難しい顔をしたアメジにドカーンとバカ明るくラルドが言つた。ア
メジが来るまでに、祭りの準備は整つていた。

族長がリスター族の長なら、大神官は、水晶使い巫女たちの頂点に
立ち、弟子たちの指導にあたるはもちろん、族長のサポートを務め
たり、水晶の研究や、祭りを仕切るのも重要な仕事である。水晶使
いの長なのだ。

特にこのラルドは、明るい性格も証明するとおり、大の祭り好きな
のだ。おまけにリスターの女好きでもあり、その地位を利用した

セクハラも数しれない。さらに尻フヨチで、尻のでかいアメジはラルドにとつて理想そのものであった。今後もこのジジイにアメジは振り回されることになりそうである。

「さて、祭りに行きますぞっ。アメジ殿歓迎の大祭りじゃー。」

「祭りつて…え、ちょっと、あたしは救世主なんか…。」

面倒くさがりアメジ、とても嫌な予感がした…。

「祭じやーーアメジ殿歓迎の大祭じやーー！」
ラルドの大きな声を合図に人々は集まり、日が落ちる頃には祭りの準備は整っていた。

街の中央に位置する寺院前の広場に、リスター中の人たちが集い、にぎやかな祭り独特の空気が漂っていた。

広場中央の祭りの時のみに設置する台を丸く囲むように、楽器を奏でる男達に、その内側で踊る娘達。その他観衆、樂器の音、人々の声、広場は祭りの音でいっぱいになつた。

祭りだ祭りだとはしゃぐラルドとは対照的に、アメジはがっくりとしていた。

（はあ、なんなんだ、このジジイは……それに救世主ってなんなによ？）

はあ？……てかさ、マジでここは百年後なの？

聖乙女の儀式つて……あたしはただムカツキながら眠つていただけなのに。

わけわからんよ、でもたしかに、だれ一人知つたやつがいないし……信じるしかないのか？）

ハナーと深いため息をついて、アメジはめんどくさいうな表情でラルドを見た。逆にラルドは満面の笑みで返してきた。

ラルドがアメジをテント下の席に着かせると、二人のもとにジストがやつてきた。

「ラルド様、なにもこんな時期に祭りなど行わなくとも……」「なにを言つとるんじや族長。こんな時だからこそ祭りをやってみんなの気持ちを高めてやるんじやろうが。ほれ、アンタもさつさと

そこに座りなされ。」

そつぱつジストをアメジの横の席に着かせた。

「わあ、皆の衆アメジ殿のために祭りをおおこに盛り上げよつべ。
わあわあ歌えや飲めや踊れや騒げや、ワハハハハ。」

ラルドの仮団とともにこれらに祭りは盛り上がった。ラルドは大きな声で笑いながら酒を飲み始めた。

「おい、なにしとる！もつと美味しいものを持ってこんかいさや、アメジ殿どんじんいてくだされ。」

うごわりしていたアメジも、田の前に差し出される数々の「」駆走を田にするととたんに嬉々とした顔になった。

「うひょー、いいの？おじしゃー。んじやま、お皿葉にせえていた
だきます。」

単純アメジ、食事中は悩みなど無れ主義。乙女である」とをされ、
飢えた野獸の」とくかつくらつ。

「おおお、こい食いつぶりですなー。わすがアメジ殿、
こい尻をしおるだけあるわ。」

「ぶふおーーー尻は関係ないわっ！」

(なんかわけわかんないけど、すっげ美味しいんですけど、こんな歓迎初めてなんですか？、もしかして族長の妻になれなくても楽できるかも？)

アメジの中に新たな道が見えた気がした。

アメジがメシにかつくらつている最中、演奏の曲調が変わり、踊り子達の舞いががらりと変わった。

観衆の視線があるところに集中した。

「おおっ、始まりますぞ、あやつの舞いが。」

ラルドがそう言つて目線をやつた先にいたのは、神の下僕である精靈の面をつけた、他の踊り子とは違つた衣装を身に纏つた娘だつた。

「…サファ。ケガは大丈夫なのですか？」

その娘がサファだと気付いたジストは心配げにラルドに訊ねた。

「舞いに支障はなからひ、さあ始まりますぞアメジ殿。」

「ふえ？」

ラルドに言われてアメジは初めて広場中央の舞いの場に目をやつた。精靈に扮したサファは曲にあわせてゆつくりと、中央の舞いの台へと登つていった。

巫女は女の水晶使いでもあり、踊り子の最重要踊り手でもある。

巫女であるサファだけが舞うことを許される精靈の舞いは、かすかに体内の水晶を放ちながら舞う特別な踊り。

その踊りの力は、舞いを見るものの気持ちをさらりと高ぶらせる」とができる。

サファの舞いによつて、広場中の人々の気持ちは一体となり、そこはさらに不思議な空氣につつまれていた。

その踊りを見ていて、アメジの中のある感情も高まつていて了。

「ふむふむ、さすがはワシの孫じや。今となつてはあの舞いができるのはあやつだけじやからのひ……」

「ラルド様…」

遠い目をしたラルド、少ししてアメジにこう言つた。

「そうじやー！アメジ殿なら、すばらしい舞いが舞えるに違ひない！アメジ殿、ぜひひとつ舞つてはもらえんかの？」

「えつっ！？」

「ぜひとも頼みますわ、アメジ殿。あやつらにありがたい舞いを見せてやつてくれんかの？！」

「ちよつ・・・ちよつと待つてよ・・・な、なに言い出すんだよ？いきなり・・・」

アメジ焦る、焦るにはわけがある、

つまりアメジは
……。

「まあ、アメジ殿のありがたきまらん舞いを見せてやつてくださいんかのう。」

酒に酔つた赤らんだ顔のまま、ラルドは隣に座るアメジに頬み込む。「ちょ…ちょっと、いきなりなに…」

焦るアメジ。

「おい、聖乙女殿の舞が見られるらしいぞ。」

近くにいたれかがそう言つたのを合図に周りは盛り上がり始める。聖乙女のありがたい舞、だれもが見たい見たいと騒ぎ出した。それそーれと。

ヤバイ、たらりと汗が伝い、さらにも焦るアメジ。

「さあさあ、アメジ殿、見せてくだされ。演奏はアメジ殿に合わせますから。」

「あ・・・あの・・・ちょっと・・・今日は調子が・・・腹が・・・悪いけど少し向ひで休んでくるわ・・・。じや。」

そう言つて、腹をさすりながらアメジは席を立つた。

「な、なんとアメジ殿食べすぎですかな? ややそれは大変じや、ワシが腹をさすつて・・・」

「じゃ、あたしあつちのほうで休んでくるわ、今田はありがとね、ラルドのじいさん。」

アメジはそそくせとその場を去つていった。慌ててアメジの後を追おうとするラルドは、醉いがまわつて席を立とうとすればふらついてしまつた。

「ラルド様、アメジ殿は私が・・・」

ふらつくラルドをジストは席に座らせると、アメジの後を追つた。

「おお、またんか族長、ワシがアメジ殿の尻をさす・・・つひいつく」

アメジが抜けた後も祭りは続き、人々は盛り上がつていた。

「はあ・・・ヤバ・・・踊りなんて、やれるかつての。」

祭りの音から遠ざかつた広場を見下ろせる場の階段の上で、アメジはため息をついた。

「踊りなんて、ぜつて一やらねえ。」

アメジ、踊りを嫌がるにはわけがあつた。

巫女は女の水晶使いでありながら、祭りの大事な踊り手でもある職業。

水晶使いの能力と同様に踊りの能力も巫女には必要不可欠なのだ。

しかしアメジは、踊りがまったく苦手だつた。

幼い頃、踊りの下手くそっぷりを周りに笑われていたことがトラウマとなり、それ以来、人前ではなにがなんでもぜつたいて踊らないと誓つたのであつた。

そんなアメジがなぜ巫女になれたかというと……、
親のコネというやつである。

父オルドと親交のあつた大神官トパーズは、オルド亡き後はアメジの親代わりと成り、アメジを巫女にしたのだ。

アメジを巫女として鍛えてやるつもりが、アメジのぐうたらぶりは予想以上で、アメジはほとんど巫女の修行をしなかつたのだ。

当然踊りなど、一度も練習しなかつた。

ゆえにアメジは人前では踊らぬと固く誓つているのだった。

「はあ、でもあのジジイしつこそう、カンベンしてほしいよ。」

ふう、ともう一度深いため息をついた後、自分を呼ぶ声に気付いた。

「アメジ殿！」

階段を駆け上つて、ジストがアメジの前に現れた。

「…う・げ」

「お体は、大丈夫ですか？」

「あ、いや、まあ…でも踊りはきついかな？あはは。」

「すみません、みながムリを言って…・・・」

「ははは、いーつことよ。なんせ聖乙女ですから（ちよつと調子ぶつこいてる？あたし）」

アメジの様子を見て一安心したジストは、祭りの光に包まれている広場を見下ろした。

「いつ黒水晶が襲ってくるかわからない、いつ何時も気を抜いてはいけない状態なんです。

ラルド様の祭り好きも考え方なんですが……。

アメジ殿の歓迎は、黒水晶を倒した後でちゃんと行いたいと思っています。」

「へへへ、そう？　ま歓迎会は大歓迎だけどさ。」

ジストの目線は広場を見下ろした後は、空へと向かっていた。黒水晶を常に警戒していた。

「そういえば、祭りで巫女の舞いはひとりだけだったけど、他の人はどうしたわけ？」

祭りの様子をふと思い出して訊ねた。

「・・・巫女は、彼女サファひとりだけなんです。」

「へ？」

「他のものは、みな黒水晶に殺されました。

彼女の姉たちであつた巫女たちも、多くの水晶使いや聖獣も、黒水晶との戦いに敗れて、リスターの民のほとんどが黒水晶に家族を奪われ、深い傷を負つた。……早くやつを倒し、人々を守る。それが族長としての私の使命なんです。」

（黒水晶に、みんな殺された？・・・ずいぶん皆明るいから、そんなかんじ受けなかつたけど、黒水晶つてそんなやばいやつなの？）

「先日唯一の巫女のサファが負傷し、しばらく戦えないと思つていたところ、ラルド様から聖乙女殿のことを聞き、神殿に行つたんです。・・・そして、アメジ殿、あなたは現れた。」

現れたというよりか、正しくはジストによつて起こされたアメジ。

「お願いしますアメジ殿！私たちに力を貸してください。

リスターの人々の希望の光となつていただきたいのです！」

「うえつ？」

アメジに頭を垂れるジストにアメジは少しうまづいた。

それつてつまり、あたしにあの
バケモノと戦えつて言つてるわけ？

黒水晶……。

アメジが幼い頃、父オルドと遺跡を巡つていた頃、土壁に眠る化石
を田にしたことを思い出した。

「うわっ、オヤジ、コレすげーでけーバケモン！」

「ああ、黒水晶だな、こりやいつの時代かな……。しかしこいつも
でけーな。んまあ、俺がやつつけたやつはこの倍だつたけなあ？」
むき出しになつたその化石をさすりながらオルドは言つた。

「ええつ？マジでオヤジこんなバケモノ倒したのか？」

「ああ、マジよ。あのころの俺は、かつこよかつたぜえ。ま今は今
で輝いているがな。

アメジ、お前もめんべくさがつていねーで、
かつこいい生き様つての見せつけるかつこいい人間になるんだな。
俺を見習つて、な。

「は？なに言つてんだよ？バカオヤジのくせによ！」

「は、なにを言つかバカ娘。黒水晶ひとつも倒してねーガキに俺の
かつこいい生き様を否定する権利はないってのよ。」

「なんだとーーームキー！」

父親とバカみたいな口喧嘩を繰り返しながら、遺跡の中を渡り歩い
ていたあの幼き日々、アメジは思い出し懐かしく、そして……

「くつそー、やつぱオヤジムカツク！」

「へ？」

「ハン、オヤジにやれてあたしにやれないわけないじゃんよー。黒水晶なんて三秒でやれるってのよ。」

アメジは握りこぶしを天へと突き出した。空の人となつた父オルドにむかつての挑戦状。

「本当にですか？アメジ殿！」

「へ？」

ジストの声で回想シーンからリアルへと引き戻されたアメジ。

「ねえ、もちろん黒水晶倒したら、ちゃんと歓迎会してくれるんでしょ？美味しいものいっぱいくれるんでしょ？アメジ様万歳でしょ？祭つてくれるんでしょ？アメジ伝説轟くんでしょ？」

「え、ええ…、もちろんですよ。」

興奮気味のアメジに少し引くジスト。

(そつかー、なにも族長の妻にこだわることなかつたんじゃない？
楽して生きる道、見つけた！かも)

アメジの返事に喜び、早速ラルグのもとへ報告に向かおうとするジストをアメジは呼び止めた。

「ねえ、ジスト、あなたさ、年はいくつなの？」

階段を七段ほど下ったさきでジストが振り向いた。

「え？… 22になりますが…」

「年上じゃん！ あのさ、そのアメジ殿つていつの止めくんない？あと敬語も。」

あたしかたつくるしこの苦手なんだよね。」

少ししてからジストが答えた。

「そう、ですか・・・なら遠慮なく。

アメジ、ありがとうよろしく頼む。」

「おう、こっちこそよろしくな、ジスト。」

アメジの中で高まっていた感情・・・それは：

救世主になれば、みんなにちやほやされて、楽できんじやん。うふ

ふ。

しかし、アメジ気付いていなかった。その矛盾に・・・。

第7話

祭りから一夜明け、アメジはラルドに呼び出され、寺院に向かった。
「ほれいアメジ殿、ふれぜんとふおーゆーくじや。」

「はひ?」

そう言ってアメジに差し出されたのは、

手のひらに収まるサイズの、ドクロ水晶だつた。

「ドクロ・・・水晶じやん、なに? なんで?」

「族長に聞いたところ、じつやうアメジ殿はドクロ水晶を持つてないそうじやの。」

それを聞いてワシが徹夜で(マツハで)作ったんじやよ。」

「・・・・あ。」

アメジ、昨夜のことを思い出した。たしかにジストに戻った。黒水晶と戦うと。

「これがないことに戦えんじや。でアメジ殿のために急いでこしらえたのじや。」

愛情をたっぷりと詰め込んで、なべ

「ははは、ありがと。(愛情はいらんけどな)」

苦笑いしながら、ラルドから(愛情たっぷりの)ドクロ水晶を受け取つた。

「さあ、書は急げといこますや、まこひつかアメジ殿。」

「へ?・・・はい?・・・・・」

わけもわからず、アメジはラルドに連れて行かれた。

街を出て、少し登り、山岳神殿に向かう途中の広い場に出た。

そこからはリスターの街が見渡せ、アメジのいた水晶神殿へと続く道が分かれている。

そこにはすでにジストとタルがいた。

山脈の向こうを見据えていたジストはラルドとアメジの到着に気付くとそのほうへ振り返った。

「族長、様子はどうじゅじや？」

「ラルド様。・・・まだですが、そろそろ、来ると思います。」

「そうたる。この時間はあいつのお昼ご飯の時間たる。」

シリアスな表情の彼らとは反対にアメジは？な表情のまま、状況を理解できずにいた。

「そういうことじや。アメジ殿・・・準備はよろしくかの？」

「へ？」

わけのわからないアメジ、もドクロ水晶へと皿をやつたラルドを見て、なんとなく事を理解した。

「・・・え、ちょ・・・まさか・・・もう？」

汗たらたらアメジ、アメジの不安などわからず「ぐりと頷く二人と一匹。

まさか、昨日返事で今日かよ？！

いきなり、あのバケモンとヤルつていつの？！

来た！とジストの声で、みな山脈のほうへと目をやった。
アメジたちを覆いつくす黒い影は、あの日、アメジの前に現れた、
あの黒水晶だつた。

ドス黒い目でアメジたちを確認すると、ギャアアアーーーとガラスを爪でこするような声をあげた。

「ぶつひゃー、でたよ、やつぱでけーな、おい。」

アメジまばたきも忘れ、黒水晶を見て固まる。

「よし、いくぞタル。」

「おつけーたるよ！」

ジストとタル、慣れているのか、冷静に黒水晶を見て、構える。

「まかせましたぞ、アメジ殿！」「

「はい？」

氣付けばラルドは、アメジたちのはるか後方の岩陰にと身を潜めていた。

(おこ、なにひとつだけ安全地帯にこねんだよ?。.)

「アメジ！道しるべを！」

「へ？ はい？ なんですか？ 道しるべつて・・・？」

それに対する反応したのがタル。

卷之三

う、
う、
なんだ？

?な表情のアメジ、ラルドの目線のドクロ水晶に気付く。

そうか、これ、ね。

ラルビに皿で合図を送ると、ラルビは「いい」と頷いた。

これがことか……しかし……どうやって使うんだ？「これ

・・・・・ みな の 期 待 の 目 線 に ア メ ジ 汗 出 る ・・・・・

ヤバイ、決めないと、かつこいい生き様を・・・オヤジじゃないけど（恥）

ごくり、アメジ決意。

左手に握り締めたドクロ水晶を天へと掲げた。

「くらえー、黒水蟲——！やあ！」

と叫んだ。

「はい？」

がうーーん・・・という切ない効果音とともにジスト、ラルド、タルの切ない声がした。

その反応に、アメジまちしても汎

「あれ・・・? なんむすりうねえ・・・」

「あいつ、やつぱ・・・ダメダメたる。」

はあ、とタルおもいつきりあきれでジストを見た。

「もじや ノンシ麗
黙りで見てリハーパラの昌の使い方を忘れてしまったのかのう？」

??な表情ながらも、アメジにいまだ期待の表情を送つてくるラルドに、申し訳なさそうにアメジは

「いや、ていうかあたし・・・初心者・・・なんんですけど。」

自分の間へのかわりにトケロ水蟲をほりほり

がくーんとするジストとラルドに、レーニンはんとにダメたる。と殺意さえ露わにするタル。

「アメジ殿・・・・・マジですか・・・の?」

アメジは初心者だった・・・。
ろくに巫女としての修行をつんでおりず、当然といつか、ドクロ水
晶の使い方もわからなかつたのだ。

「あーもーつかえねーたるつゝ、お前やつぱーせモンたるよー。」

ブチキレで背中の毛がぶわつと逆立つタル。

まさか、という表情のジスト。

すまんすまんとアメジ・・・。

ちーん・・・・さみしい空氣の流れる中、こちらの都合などおかま
いなしに、空中の黒水晶は大きな口を開けたまま、アメジたちへと
迫つて來た。

「アメジ殿！ 危ないですぞ！」

「うひつ」

反射的に左方向へと飛び込んで、黒水晶の攻撃をかわしたアメジ。
アメジたちを横切つた後、また空へと高く舞い上がる黒水晶。

やつがこちらへと向き変える間にとラルドが叫んだ。

「むむむ、しかたないのう。

アメジ殿、ワシが使い方を教えますから、その通りにやつてみて
くだされ。」

岩陰から顔をのぞかせながら、ラルドが言った。

「えつええ・・・・わつわかつた・・・・（ぶつつけ本番かよ？）
すう、と息を吸つて、心を落ち着かせるアメジ。

ええい、やるっきゃやねーな、やつてやうーじゅん
樂できる人生のために！……

「よしひ、いいよラルじい！」

きりつとラルドに答えるアメジ。

「では、アメジ殿、ドクロ水晶を片手に構えてくだされ。」

「おおひ、こう？」

アメジは右手にドクロ水晶を持った。

「で体内の水晶をそのドクロへと集めるのじゃ。

大事なのはイメージですぞ。水晶の流れをイメージですわ。
水晶をそのドクロへと集めてみなされ。」

「ドクロに水晶を集める？？」

とりあえず目を閉じて、イメージしてみる。

気持ちを右手のドクロにと、力をこめて、集まれと集中してみる。

「むむむむ。」

そんなアメジの様子をあきれながら見てるタル。

「いきなりできるわけないたる。・・・・あいつに期待するだけ損
たるよ。」

「タル、いいから準備するぞ。」

ジストはアメジの道しるべが来る」と信じ、右手に水晶を集め始
める。

そしてタルも戦いへと集中を始める。

「タルはジストについていくだけたる。」

集中力。ここぞという時の集中力はアメジはかなりのものだった。
ドクロ水晶が輝き始めた。ソレを見て一番驚いたのが本人。

「おおつ、光つていいよドクロ！」

「アメジ殿、そのままを保つんじや、それでもう片方の手で、
ドクロ水晶を触れてみなされ。」

「いじ？」

アメジは左手人差し指をドクロのおでこにあたる場所にさよると触
れてみた。

「ドクロから指を離して、線を描くように水晶の光の線を描くのじ
や。」

ゆっくりと左手の人差し指をドクロから離すと、
ドクロより流れる光の線が、アメジの左手人差し指にて描かれてい
く。

「わわ、すげー、描けたよ。」

喜ぶアメジ、するとふつと線が途切れ、ドクロの輝きも消えた。

「あれ？」

「アメジ殿、常に集中、水晶を放出し続けるんじやよ、わつ一度。」

「おおつおつけー。」

再び、集中、アメジ、水晶の流れをイメージするのは得意なのが、

それともこれが聖乙女の力なのだろうか。

コツをつかんだアメジはノリノリで光の線を描き出した。

「よし、いいぞ。」

「ふん、それくらい巫女なりできて当たり前だるよ。」

「で、で、どーすんの？」

「アメジ殿、線が途切れぬよう、常に水晶を出し続けることを忘れ
んよう、元気！」

で、その線が聖獸の大事な道しるべじやからの、

黒水晶へと向かう光の道を描くのじや。

やつは直線の動きには敏感じやから、できるだけ曲線を描くのじや、

螺旋を描くよう」の。」

よしつ、とアメジは答えて、光の線を空に描きながら、走った。

ジストとタルの周囲を走りながら、光の線を描いていく。

「なかなか力強い水晶の道じや、さすがアメジ殿。」

ギヤアアーーー、アメジたちへと向き直つた黒水晶の次の攻撃が来る。

「アメジ殿、その光を黒水晶へ向かうようイメージじや。ボールをやつ田掛けで投げるようないmageするとじよ」と思ひますわ。」

「おっしゃー、いつけーい。」

左手から、ボールを投げるようなフォームで、光の線を黒水晶へと放つた。

アメジの指より放たれた光の線は、空中で羽ばたく黒水晶へと向かつた。

それと同時に、ジストの手より放たれた水晶を受けたタルは、輝く光の兵器となり、

アメジの描いた線の上を駆けるように、凄まじいスピードで黒水晶へと向かつた。

確実に黒水晶の死角から攻め込むことができた。

光の兵器と化したタルの体当たりによつて悲鳴を上げる黒水晶。

タルが黒水晶へと到達したと同時に、アメジが描いた光の線は消滅した。

黒水晶へと一撃を与えたタルはジストのもとへと戻ってきた。ジストは再びタルに水晶を放ち、アメジの道しるべを待つ。

「アメジ殿、また同じ繰り返しですぞ。」

「よし、なんかコツつかんだかも、任せて！」

調子こいてはりきるアメジ、再びドクロより光る水晶の線を描いていく。

大地を蹴りながら、駆ける、跳ぶ、大きく曲線を描きながら、ジストたちの周囲を、土壁を駆け上がり、空高く舞いながら、弧を描いていく。

力強く大地を蹴るアメジの足によつて砂煙が舞い上がった。

さあ、いっけーい。と指先の水晶を、光の線を、黒水晶へと再び放つた。

同時に光の道を翔る光の生物、アメジ、ジストとタルの連携の繰り返し、

何度も黒水晶に打撃をくえ、そのたびに黒水晶は悲鳴にも似たあの

耳に障る声をあげた。

「それにしてもあんな戦い方する巫女初めて見たたるよ。サファとは全然違うたる。」

「ああ、なんて力強い舞なんだ。・・・しかし、水晶の量の調整が気になるな。あれでは体が持たないんじゃ・・・。」

何度か打撃を与えたが、それでも巨大なバケモノは特に外傷もなく、戦いは長期戦になるかと思われたが、またしても黒水晶はなにかに呼ばれたかのように、ギャアアアーーと鳴くと、山脈の向こうへと飛んで行つた。

黒い影が去つたと同時に、アメジは急ブレーキがかかつたように止まり、その場へと倒れこんだ。

「アメジ殿、大丈夫ですか？！」

安全とわかるとすぐラルドはアメジの元へと駆けてきた。

「Ｖ？・・・」

「おお、もちのろんじやよアメジ殿、Ｖですじや。」

やつりー、よつしゃーと叫びたいアメジだったが、立ち上がることができなかつた。

「あ、あれ？なんか体変なんですけど・・・？」

体力には自信のあつたアメジなのだが・・・。

「アメジ殿、水晶の量をコントロールする力が、いまいちのようですね？短期決着方の戦い方でしたぞ？」

「はひ・・・？」

アメジ、ろくに巫女の、水晶使いとしての修行をつんでおらず、当

然の結果かもしれないが、

とりあえず、ぶつけ本番であったアメジの初バトルはなんとか成功に終わった。

「おお、アメジ殿、なかなかよくなつてきましたぞ。」

「うん、なんかわかつてきたかも、やっぱ、やっぱ天才？あたし「いやいやまさにそうですわ、アメジ殿は生まれ持つての強い水晶の持ち主のようですから。やはり救世主なんじや。」

ラルドはひたすらアメジを褒めまくる。そのたびにアメジはいやー、当然でしょ。とうれしげに鼻高々。

あの戦いの後、アメジはジストの勧めもあって、ラルドの元で水晶コントロールの修行を受けていた。

寺院の中で親切丁寧に教えを受けるアメジ、たまにラルドにケツをさすられ、そのたびにラルドに飛ぶ鉄拳、そしてまた修行、を繰り返していた。

「ジジイ、ヨイショしそぎたる。あいつはおだてられるとなりますます調子に乗るタイプたるよ。」

「たった数日であれだけの上達・・・頼もしいな。アメジがいれば、あの黒水晶も近いうちにきつと倒せる。」

こつそりと様子見にきていたジストとタル。アメジの様子に期待の表情を見せるジストと対照的に不安げなタル。

「まあ、どんなアホでも強ければ文句ないとあるけど、ジストとタルの足をひっぱらなければ。」

そう言つてアメジに意味深なウインクをして寺院をあとにした。

その日、ラルドのもとで修行を終えたアメジ。

寺院から出ると空にはもう星空が広がっていた。

寺院を振り返り、アメジの中にふと思い出された顔、それは……。

「トパーズ様……。」

本当ならアメジの師はトパーズであつた。しかし、アメジはろくに修行を行わず、トパーズの言うことを聞かず、いつもモンドと遊んでばかりいた……100年前……。

だが、アメジの記憶の中ではついさっきまでの記憶だつた。

「はは、変なカンジだな。本当ならあたしはトパーズ様に教わるはずだったのに……。」

ま、ラルじいには感謝だけね。

エロいのは問題だが……。」

ふう、と息をついて空へと目をやつたあと、ふと街中にむけた目に飛び込んできたのは、

夜風になびく白い髪、月夜に照らされたその後姿の人アメジの目にはあの人があつた。

「トパーズ様?!」

アメジはその人を追つた。

ここは百年先の世界

アメジの知る人は誰一人いないし、いるはずがない

でもまさか、もしかしたら、という思い

もしかしたら幻を見たのかも？

それでも・・・

かすかな望みがアメジを走らせた。

階段を駆け上がり、リスターの街の一番高い場所まで出た。

その影は、街の外へと消えた。

アメジもあとを追つて、外へでた。

真っ暗な山道を登り、最近黒水晶と戦った広い場へと出た。
そこからさらに、アメジのいた水晶神殿へとむかう道の途中、
アメジの耳に入ってきたのは、楽器の音……。

「笛？」

そしてその笛の音に乗せて流れてきた唄い声。
その音の方向へと歩みを進めるアメジ。
そしてアメジの向かう先にいたのは……

笛を吹く白い髪の男と、その傍らで笛に合わせて歌っているタルよ
りも一回り小柄な聖獣だった。

男はトパーズではなく、アメジと年の近そうな若い男だった。

アメジに気付いた聖獣は唄を止め、大きく丸く揺れる瞳で、じっと

アメジを見た。

歌がやんで一秒後、男は演奏を止め、アメジのほうへと向いた。

「だれだ？お前。」

こちらが問い合わせるより先に問い合わせられたアメジ。

月明かりと同じ光を放つ瞳に睨まれ、お前こそだれだよーーとつづ

こむ事を忘れたまま、しばし立ち尽くしていたのだった。

第10話

「ふひー、もうお腹いっぱいなんだけどー。

もう、みんなさあ、アメジ様万歳アメジ様万歳つていいすぎー。
ああ、きらめき憧れのアメジごて・・・・んじゅつ

「いつまでだらだら寝てるたるか?! ぐうたらアメジー!」

激しいタックルを受け、ベッドから転がり落ちるアメジ。
いつてー、とむくりと起きるアメジにどすんとタルがのつかかった。
「おもっ、ブタ聖獣が、ここに・・・」

「うわー、あ、行くたるよー。」

午前七時に起こされたアメジは、今日もタル、ジストとともに街の外から黒水晶の警戒にあたる。

アメジは住む場所をラルドより与えられていた。寺院すぐ側の一階建ての小さな家で、アメジ的に少し不満だったが……。
そのうち超豪華なアメジ御殿を建ててもうひとつこの野望でいっぱい
なアメジはとりあえず我慢していた。

樂できる人生のためなら、なんだって我慢できるし、やつてやるわ。
とわけわからんことを思いながらだ。

前回と同じ場所で黒水晶を撃退、今回も同じように喧嘩を引き上げていった黒水晶。

「今日も逃げられちまつたね。ああ、くそ、あと一息つてかんじなのさ。」

アメジもあの戦いからずいぶんとバトル慣れしていた。

ラルドの特訓の成果もあるが、実戦で伸びるタイプであるようだ。

「けどダメージは蓄積されてるはずたる。次こそはいけると思ったるよ。」

「そうだな、それに最近被害が出ていない。」

「そういえばそうたるね。とタルが頷いた。

最近は、黒水晶による死傷者がまったく出ていなかつた。いつもこの場で撃退できていたのだ。

「それってあたしのおかげだったりしてね。」

「違うたる！ タルとジストのコンビネーションたるよーお前はすぐ調子に乗るたるー。」

こないだまでドクロ水晶の使い方もわからなかつたくせに。」

タルはアメジにつつかかるが、タルはアメジの水晶に戦いの中で絶対の安心感を感じるようになつていて。ジストの水晶をうけ光の兵器となつた状態の自分を導いてくれる力強い水晶に、その身をまかせられた。戦いの中で、アメジとタルは信頼関係を築いていた。ジストも、族長として常にみなを引っ張ってきた立場であったが、戦いのとき、気づけばアメジに引っ張られている瞬間があることに気づいた。

そして頼れる背中というのを数年ぶりに意識した。・・・・自分を引っ張ってくれた力強いあの遠き背中を、それは戦いの中に安心感を与えてくれた。

アメジの戦闘での集中力は自分を超えているのではとも感じた。

その分、普段はそーとー一氣が抜けているのだが・・・。

山道を下り、街へと入った三人をサファアが向かえてくれた。

「お疲れ様でした。」

「サファ、出迎えありがとう。」

「ええ、私も次からは一緒に戦いますわ。もつヶガも癒えたし」
そう言ってサファはジストに元気そうにアピールした。

「さうか、それはよかったです。じゃ、私はこれから会議に向かうから。
・・・

「じゃ、タルはさきに帰つてまつてゐたるね。」

と街についてすぐ解散となつた。

「あ、アメジさん、おじい様から、今日の修行はお休みだそうです
よ。」

「へ、そうなの（よつしゃ、帰つたらだらだらだらけられるぜ）」「ジストの背中を見送つたあと、心配げな表情でサファはアメジに訊
ねた。

「あの、アメジさん・・・ジスト様の様子？」

「へ？ なにが？」

「疲れていた、とか、ムリしていたかんじとか・・・なかつたです
か？」

「へ・・・、別に元気だったけど・・・。」

「そう・・・。」

アメジの返事を聞いても不安な表情のままのサファ。

「なに？ あいつ、どうかしたの？」

「ええ、その、ジスト様すごく族長としての責任感の強い方だから、
みんなのためにつていつもムリしたり、なんでも一人で背負い込んで
だりつてどこがあるから・・・。連續で黒水晶と戦つたり、おじい様
のワガママ聞いたり、族長の仕事だって毎日あるのに、疲れていな
いほうがどうかしてゐるわ。」

ジストはみんなのためなら、自分の気持ちなど後回しにしてしまつ。

そんな性格だから余計心配なのだと。

「ああ、たしかに、あいつのだらけてゐところなんて一度も見たこ
とないしね。」

・・・そのうち過労死するんじゃないの？がんばりすぎてなんて・・・

・

「そんな」

「あつ、冗談だつてば（汗）いや、あいつ丈夫だし、水晶も強いし、心配することないつて。」

「ええ、でも、せめてジスト様の代わりに戦える水晶使いの人人がいればと思うんですが・・・」

そういうえば、ジスト以外に戦っている水晶使いがいなかつたな。

「なんで？あいつの他に戦えるやつっていないの？」

「そういうわけではないんですけど、有力な水晶使いはほとんどの方がもう亡くなられてしまつて・・・あとは戦えない体になつてしまつたり・・・」

ジスト様並の水晶使いは、いなくなつてしまつたんです。

若手の水晶使いはおじい様が許可を出してなくて、戦えないんです。だから、今まともに戦えるのがジスト様だけです。」

ふーん、若手でも使やーいーのに・・・まさかラルじいのジストトイジメ？？なわけないか。

「じゃー、結局はジスト一人に頑張つてもうつしかないんじやん？」

そうアメジに言われてがくーんと俯いて考え込むサファア。

「・・・ジスト様の代わりに戦える水晶使いがいれば・・・。

あ・・・もしかしたら・・・」

早く帰つて「さうさうしよう」と思つて家路に帰るのとするアメジを、なにか思い出したサファアが呼び止めた。

「心当たりが、ひとりいます。」

「は？」

帰らうとしたアメジをサファアは駆け寄つて止めた。

「あの、アメジさんにお願いがあるんですが・・・」

「はひ？」

「その人のところにお願いにいってくれませんか？」

(ちょっと、なんであたしが……?)

「お願ひします、アメジさん…」
ジーするー・・・らいらいー・・そんな瞳でアメジに頼み込むサワ
ア。

ラルドに世話をになってくる身のアメジ・・・しぶしぶ弓を抜く
ことになつたのだった。

サファからジストの代わりに戦える水晶使いを連れてきて欲しいと頼まれたアメジ。

「で、だれなの？その人は。」

「え、あの、実はジスト様の弟である人なんですが・・・」

「へ？ジストの弟？いたことも知らなかつたんだけど。」

「ええ、というのも、その、私ももう十年以上お見かけしてないと
いうか・・・。」

幼い頃、お父様である前族長から水晶使いとして育てられていたはずなんですが、

今はどういう状況なのか、私も、知っている人もほとんどないと
いうか・・・。」

「へ？なにそれ、ジストの弟なんじょ？」

「ええ、そうなんですけど・・・その、

もう十年以上も家に引きこもつていてるらしくて・・・よくわからな
いんです。」

は？・・・十年以上引きこもつていてるジストの弟？なんなんだよ？
そりや・・・。

「ものすごく気難しい人らしくて、だれが訪ねても絶対に会わないと
らしいんですよ、でもきっとアメジさんなら・・・」

「なんであたしなら？」

「水晶の聖乙女・・・ですし、はい、きっと会つてもういるんじや
ないかと。」

なんだよ、その理由はわけわかんねー。

「んー、とりあえず行つてみるけど、ダメだったら諦めてよね。」「ほんとうですか？！お願いします。」

めんどくさいのは嫌いだったが、これも来るべきアメジ祭に備えてアメジ信者を増やしておくるのも悪くない、アメジの脳内では黒水晶を倒した後に行われるであろう祭、アメジ感謝祭を妄想していた。

サファに聞いたとおり、そのジストの弟が住むといわれている場所へと向かう。

中央広場からずっと上、ひたすら階段を登り、街の外に出る一歩手前、左手方向に向かい、住居が立ち並ぶ路地を抜け、行き止まりかと思えた場所からさらに続く細い道、人気のない、なんだか昼間なのに日のほとんど通らない寂しげな場所、その奥に一件だけ立つ古くて寂しげな家屋があつた。

「……か……てマジで人住んでいるのか？」

疑い眼ながらもアメジは戸を叩いた。

「ごめんくさい、みんなの人気者聖乙女のアメジさんですけどー・
・・・いらっしゃるかしら？」

2、3度戸を叩いたアメジ、しかし、まったく反応がなかつた。

やつぱ、いないのか……諦めて帰ろうかと思つたアメジは、曇つた窓の奥に、動く影を見つけた。

「いるんじゃん？くそ、アメジ様に居留守ぶつこくとは……あれ？……開いた。」

カギをかけ忘れていたのだろうか、それともカギが壊れていたのだろうか、戸が開いた。

そのままアメジは進入した。

「お邪魔しま・・・おひ。」

入つてすぐアメジが田にしたのは大きな本棚に、ずらーと揃つたたくさんの書物、部屋中にもたくさんの書物が転がっていた。目に映るは本ばかりであったが、古びたテープルの上には小さな袋に入れられたクッキーらしきものが置いてあった。

「ん? これクッキー? ・・・くんくん。」

手にとつて食べられそうなのかと匂いをかいでみた。

「そ、それ・・・マリンのどちら・・・」

「ん?」

アメジの足元から、なにか声がした。

アメジが視線を落とすと、そこには小さな聖獣が、体をふるふると震わせながら、アメジを見ていた。

「はうっつ、なに? このきやわゆい子はうつ~」

アメジの田にとつてもふりついに映つたその聖獣を触りつと、アメジはしゃがみこんだ。

「ん・・・ちみ・・・そういえば・・・」

アメジ、思い出した。アメジはこの以前会つていふことがあるよつな気がした。

そうこえは、神殿に向かつ途中の道で会つた、月夜の下で寝ついたあの子だ。

「みゅ? ! ・・・あのときの・・・」

そのこもアメジを思い出したらしく、せひほん丸な瞳をしてアメジを見た。

ああ、なんてかわいいの? ! でも、なんでこのじがこのじてるわけ? ・・・あれ? ・・・まさか・・・

まさか・・・アメジがそう思つたとき、

「だれだ？！勝手に人の家に上がりつてなにしているつ？！」

激しく隣の部屋のドアが開いたと同時に、アメジは怒鳴られた。

「あのねー、あたしは何度も呼びかけた・・・・て・・・・あ」

アメジ、その相手と目が合つて気がついた。

「あーお前、あの時の」

相手も気がついた。

あの夜の、アメジがトパーズかもと勘違いした、白い髪の笛吹き男
だった。

あの日は月明かりの中だけで、はつきりとはみえなかつたが、この
男の姿、他のリストルの男とは違つていた。

アメジとほぼ同じ年頃に見えながら、老人のように真つ白な髪。血
管が透けて見えそうなほどの白い肌。瞳の色素もとても薄く、黒い
瞳、茶色い瞳が当たり前なリストル族には見られない、金色の瞳を
していた。もう片方の目（左目）はさらに色素が薄く見えたが、気
にしているのが長く伸ばした髪の毛で隠していた。
健康的なジストの弟とは思えないほど、華奢な男だった。

こいつがジストの弟？・・・というか水晶使い？？

激しく疑いの眼を向けるアメジを、男はクッ、と睨んだ。

不法侵入者め。と敵意を露わにしてくる男を無視して、アメジは小
さな聖獣へと向き直つた。

「このクッキー君のなの？好きなの？クッキー」

「みゅ。」

かわいいーーー♪と変態くさい顔で聖獣をなでなでするアメジにさ
らに男がキレる。

「……お、マロンに触るな……」

「くえ～マロンちゃんつていつのか～♪」

「くわ、なんだこの女。」

明らかにアメジに不快な表情のままの男、それを不安げな顔で見上げる小さな聖獣。

「やうやう、頼まれ」とだ。アンタがジストの弟?」

「は? それがどうした?」

「水晶使いなら、一緒に黒水晶と戦つてほしいんだけど。

今ならこの聖乙女」とアメジ様と一緒に戦えるといつありがたいキンペーン中だけど、どうよ?」

イラついた男に対して挑戦的に言つアメジ。

聖乙女……と眉間にしわよせる男、みゅーとなにかを感じ取った表情を見せる小さな聖獣。

しばらくの沈黙が続いた後、男から放たれた言葉は……。

「へぬわーでていけ! クソ女! ……」

「わわん!」

バン!

アメジ、追い出されてしまった。

「なんだ、あいつは、ムカツクなープリプリー！
くそー、しかもケツ蹴りがつたよ、あんぐくしょー…いたた。」
アメジ、階段を下った踊り場でケツを擦つた。

しかし、ケツデカが幸いか、実は言ひもどり痛くはなかつたのだ。

あの無礼男がジストの弟・・・同じ兄弟でここまで違つのかと呆
れながら

「あいつ将来は絶対に頑固ジジイになるね、なりまくるね。
まったく、それに比べてあのきやわいこけゅ わんわ・・・
ほんわわわ〜・・・アメジ、あの小さな聖獣マリンのかわいさを思
い出し、変態くせ〜にんまりとしていた。そしてケツを擦る。

「まつて・・ぐだちやい・・・ちえいおとめ・・ちけま・・」

アメジのケツを擦る手が止まつた。アメジの背後から聞こえたこの
声は・・・

「あつ、ちみは」

アメジの側まで一生懸命走つてくる、息を切らせながら、アメジを
呼び止めたのは、
さつき出会つたマリンだった。

「マリンちゅ わん〜〜」

でへでへとアメジはしゃがみこんだ。

変態顔のアメジとは対照的にマジメな顔のままマリンが言つたのは

「あによ・・おねがいがあるでちゅ。」

「なあに？なんだい？遠慮なしに言つていじりな。」

「マリンもくろつこちゅうとたたかうでけりゅー」

「え？はい？」

「マリンも黒水晶と戦づ・・・ですづて？！」

「え、いつよ、マコンちゃん？まさか、

あいつに、お前が代わりに戦つて来いくつつく・・・とかつて命

今これが

おのれ、あの男、どこまでも腐つてやがる。

「アーティストの心」

「
？」

ちつちやいながらも必死に訴えるマリンにアメジは少し驚いた。

みんなアタマアラカニ、頭の上にとがりたいでるんでないし
められてるときたかずカツてくれたんだかず。あと、こちゅもやわゆ
ちこでちゅ。これもマコンのためにはりくつてくれたでりゅ。」

元の輪?

もうでなめ、とマリンがこぐくと頷いた。マリンの首にかけられていた小さなドクロを模つたストーンアクセサリだった。どうやら手作りらしい。マリンの宝物だと語った。

るんでぢゑ。

いんである。

「いや、どうせアタマでやあ、ちあわせでになれ。」

真ん丸い皿をひらひらとせながらも、アメジに必死に訴えるマリン。

なんてかわいくて一生懸命でいいこのの?!

こんなヤリソナちゃんにこれまで言わせるあのアケアコで男何者な
さ?

こんな小さな体で、あいつのためにあんなバケモノと戦いたいと言つたマリンちゃんの気持ち、ムダにしたくない。

「マコちゃん、ありがとう、なんてい子なのへいれしこわ。」

そう言つてアメジ、マリンをひしづと抱きしめた、直後

「あつひ、マコノ一母へもいつかり離れるたるアーヴィング。」

アメシのケツにまたしても蹴りかこ！

「一九四九年五月一日」

すつころぶアメジ、デカイケツがますますでかくなつてしまふ。

アメジが震り返る、ふんぞり返る

「あ、おねーたん。」

え？おねーちゃん？？？

「マニ、ソーニー、アーヴィングがうつむいたる。」

「えええっ？？おねーちゃんって・・・タルがマリンちゃんのお姉さん

どびつへつアメジ、ふたりをわむねわむねと観比べる。

アハハハハハ。

アメジ、まだ混乱中。

「うそだ、こんなふりきゅーなマリンちゃんとモチ顔タルが姉妹なんて、どー考えたつてありえなーい・・・。」

「お前やつぱり失礼たるつつ！」

ふりふりするタルだが、いつもことなのでしかたないとアメジを

「マリ、最近忙い」と面お世話いた

「……最近どこに行っているんだ？ 外出かけている間はおうちでおとなしく待つていろって言つたたるよ。」

「みゆ。」

「ウワサではお前があの変なやつを引ひき出したりしているって聞いたたるけど、

絶対に行っちゃだめたるよー。」

「アクト十九歳未満へんなやうなじやは二ドウか……」

アクアちゃんのわるくちゅうおねーたんなんかめりこでぢゅー！泣きながらタルのもとを走り去るマリン。「こひー、マリン待つたるー！」タルが呼んでも振り返らず去つていった。

「・・・いつたい、そのアクアってどんな奴なのよ、マリンちゃんのあの反応ただごとじゅないでしょ？」

「タルもよく知らないけど、ろくなウワサ聞かないだる。リストルのため命はつているジストとは大違いたるよ。」

どうやら、そのアクアという男、みながらあまりよく思われていないらしき。しかし、マリンだけはある態度、なにがあるのだろうか。

「あつ、アメジ、お前もしマリンがあの男に会いにこいつとしていたら止めてやつてほしたるよ。マリンはタルのたつたひとりの妹たる、なにかあつたら困るたるよ。」

タルはタルでマリンのことを想つてているのだった。

どうやら周りからよく思われていない、族長ジストの弟、十年以上引きこもつてゐる、マリンだけは優しいといふ……。

なにかありそうなその男アクア、アメジはなんだか気になつた。

その夜、水晶神殿へと続く山道に向かう影があつた。

ひとつは男の影と、もうひとつは小さな聖獣の影、

アクアとマリンだった。

どうやら彼らにとつて、夜の散歩は習慣であったようだ、いつものルートを進む。

いつもと同じ、静かな夜の時間・・・のはずだったが、それを遮るものが現れた。

「かわいいあのこと～ラブラブラン♪ト～ブー～～」

「なんだ？この耳障りな唄は？！」

「あっ！」

アクアが睨みつけた先にいた影は・・・

「アメジちゃま！」

「マリンちゅわ～んvvv」

マリンに向かつてアメジ投げキッス。

「なんでお前がここに？！」

またしてもアメジに敵意ギンギンに睨むアクアに、またしてもフフ
ンと挑戦的に睨み返すアメジ。

その二人の間でキヨロキヨロとするマリン。

「アンタから我が愛しのマリンたんを奪いに来たのよ。」

「はあ？！」

「みゅ？」

月が見守る中、アメジvsアクアという奇妙な戦いが始まったのだ
った。

「ああ、マコーンちゃんを渡してもいいわよ。」

「フン、ふざけるな！お前なんかにマリンは渡さない。」

「さらにアメジを睨みつけるアクア。

「なに？ そんなムキになるなんて……。」

「マリンちゃんはアンタのなんなのさ？え？」

「う、マリンは……。」

アメジの間にかけに口^レもるアクア、そんなアクアを真っ直ぐな眼

で見つめるマリン。

「マコーンは……マコーンは……俺の……

瞬間、アクアのアメジへの口撃が止んだ。

アメジはアクアの気持ちを確かめるように、口撃を続けた。

「ふつまさか、たつたひとりのお友達なんて言つんじや……。」

「なつ、ちがつ」

「マリンちゃんは聖獣なのよ、水晶使ないと共に戦うのが使命なんじ
やない？」

「なんだと？！勝手なことを言つた！あんなバケモノとマリンが戦
えるわけない！」

「マリンちゃんはちゃんとわかつてんのよ。そしてあたしに言つた
のよ、黒水晶と戦いたいってね。」

「なんだと？マリンがそんなこと言つわけないだろ？臆病なマリン
があんなバケモノと戦いたいなどと……。」

「ほんとうにひひひゅ。」

マリンの答えにアクアは驚いた。

「あいつに脅されているのか？」

「マリンの答えが眞実だと思えないアクア。

「ちがうでちゅ。マリンがきめたでちゅ。

マリンくろついちょうたおちゅでちゅ。ちよひてアクアちやまにおかえちちゅるんでちゅ。」

「お前はあのバケモノがどれだけ恐ろしいか、わかつてないんだろ？だから……？」

マリンの答えに頷こいとしないアクアにアメジがキレた。

「わかつてないのはてめーのほりだつ！」

「ふがつつつ！？」

アメジの助走をつけた鉄拳によつてアクアはぶつとばされた。

「ああっ、ぼうりょくはダメでちゅつ！」

「マリンちゃんはね、アンタのために黒水晶を倒したいって言つてきたのよー！」

こんな小さな子が・・・アンタを救いたいがためにつて。
小さな体でのバカデカイバケモノと戦いたいって……。
アンタ、あたしよりこのことわかってるんじゃないの?
なのに、なん……。

マリンちゃんのせいいっぱいの勇気がわからんねーんだよ?！」

「わかつてないのはそっちのほうだ。黒水晶となんて戦えない。マリンは幼すぎる、聖獣としての力なんてないに等しい。

それに、マリンを扱える水晶使いがどこにいるんだ?
諦めに似た目で答えるアクア。

そんなアクアを真ん丸い目でじっと見るマリン

「アンタじゃないの……?違うの……?」

アメジはアクアに答えを求めた。アメジの欲した答えがもどつてきてほしいと思いながら、アクアの目を見た。

「俺は・・・・・」

「・・・アクアちゃん」

俯いたままのアクアの口から吐た言葉は

「違う。・・・俺は水晶使いじゃない。戦えない。」

アクア自身の口から自分は水晶使いじゃないとでた。

サファの情報では、幼い頃に父親から水晶使いとして育てられたと聞いていたのだが……。

そこにいたのは先ほどまでアメジに敵意むき出しにギラついていた男とは別人のように、静かにうなだれたままのアクアがいた。

おそろしいほどにか弱く映つたその魂に、アメジは再び握っていた拳を下ろした。

「じゃ、しかたないか。ラルじいにでも聞いてみてマリンちゃんのパートナー務まる水晶使い探してみるか。いこ、マリンちゃん。」

アクアのよこを通り過ぎ、マリンを胸に抱いて、アメジは山道を下りだす。アメジに抱えられたまま、アメジの肩から顔をのぞかせ、アクアへと振り返るマリンは小さな声ながら、叫んだ。

「アクアちゃん！マリンじえつたいくろついやおちゅでぢゅ。ちやから、あんちんちて！」

マリンは小さいながら決意を秘めた強い目で、そしてかすかに潤んだ瞳で、遠ざかるアクアの姿を見つめていた。

深まつしていく夜の中、冷たい土の上にアクアはじっと座つたままでいた。

アメジにぶたれた頬がまだ熱く、じんじんと痛んだ。

「なんで・・・・死んだのに・・・・」

その痛みは懐かしくも苦しかったあの記憶を呼びました。
忘れ去りたい記憶、消してしまいたい過去。

アクアにとつては黒水晶以上の恐怖であつたかもしれない、その存在・・・・

「親父・・・・」

もうこの世にはいないその存在、
だがアクアの中ではまだ消え去ることのない巨大な冷たい壁。

十年前、アクアが引きこもることになった大きな原因、
なにより逃げたかったその存在を激しく思い出させてしまった。

「あの女・・・・」

ぎゅっと唇を噛むアクア、じわっと口に広がる血の味。
いきなり自分の前に現れて、マリンを奪つた上、体をまづぶたつに
されたかのような衝撃をアクアに残したアメジ。

そしてアメジとの出会いがアクアの人生を、全てを変えていくのである。

「連れてきたよ」「・・・連れてきたって・・アメジさん、マリンちゃん?」

「あいつの代わりにマリンちゃんが戦ってくれるって、ね。」

「はいでちゅ。」

ええつ? !、困ったままの表情でサファはため息をついた。ジストの代わりに戦える水晶使いを求めていたのに、

こんな小さな聖獣が代わりだなんて・・・・・(泣)

「聖獣と水晶使いは、水晶の相性が第一だから、マリンちゃん」と呟つ人がいるかどうか調べてみるわね。

マリンちゃん、ちょっと疲れるかもしれないけど、我慢してね。」

「はいでちゅ。」

サファに抱きかかえられたマリンは、若手始め、水晶使いたちのひとを回る。

水晶使ひは少しだけ水晶をマリンへと送り込む、そのたびにマリンは静電気がおきたように全身の毛がぶわっと逆立ち、体をぶるぶると震わせ、拒否反応を示した。

サファは思い当たるだけの水晶使いたちのもとを回り、マリンとの相性を確かめた・・・が

「全滅でした・・・。」

がっくりと肩をおとすサファ、その横で残念そうにしゃべるマリン。

「やっか・・・、水晶使いがいないこと、聖獣だけじゃ、黒水晶と戦うのってムリだよねー。」

やれやれ。と肩をおとすアメジ。

それ以上にさらに小さく縮こまつながらマリン

「マリン・・・たたかえないでちゅか？・・・マリン

アクアちゃんのおやくにたてないでちゅか・・・？

ちゅんなのやでりゅー！

体をぷるぷると震わせながら、ダッと走り去るマロン、アメジは慌てて追いかけた。

「マリンちゃんー！」

「ひくひ、ひくひ・・・」

小さな体をぶるぶる震わせながら、マロンは泣いていた。

「マロンなにもできないでりゅー・・・
やべたたじゅだりゅー・・・ひくひ。」

「

アメジがしゃがみこんでその小さな背中に触れると、一瞬びくとなり、またぽろぽろと泣いた。

「マリンちゃん・・・アンタなんでもこままでこいつのことを
「アクアちゃん・・・マリンのおんじんなんですか。」

マロンがチビでなきむちよわこからつて、ほかのちいじゅうた
ちはじめられていたのです。

ちよこにアクアちゃんがやつてきて、マリンをこじめてたちえいじゅうたす、みんなにげでいつたでちゅ。

マリンひとめみて、アクアちゃんにさわいでいるーーとおもったでちゅ。

アクアちゃん、ちよばこいてもいにいつていてくれたでちゅ。
ちよかて、いのちもやぢやけくちてくれるでちゅ。

だからマリン、アクアちゃんにおんかえりたいでちゅ。あさり。

くろついちよいるから、アクアちゃんまつりいんでちゅ。

いつもうなぢやれているんぢゅ・・・くろついちよわるこでちゅ。

だからマリンたおちたいんでちゅ。」

涙でぐしゅぐしゅな顔のまま、アメジを見上げ必死に訴えるマリン。

「マリンちゃん・・・。

一生懸命な、一途なマリンの気持ち、なんとか叶えてやりたこと思
う、アメジだつたが・・・・

相性の合つ水晶使いがいないんぢゃ・・・・

なんとかマリンを納得させる言葉を考えていたアメジの後方から、
サファの声が

「あつ、アメジさん、こました、あと一人・・・はあはあ・・・
アメジのもとへと駆けてきたサファは

「へ? だれよ?」

「はい、おじい様、ですよー」
ラルじい?!

太陽から逃れるよつて立っているあのさびしい家に、アクアはいた。

机の上に、置きっぱなしになつたままのマリンのクッキーに目がいつた。

「マリンのやつ、忘れていつてる……。」

小さな袋に入つたままのそのクッキーをてのひらに乗せ、マリンを心に想つた。

一年前、出会つた幼い聖獣は、初めて出会つたその瞬間から、自分をまつすぐな眼で見つめてくれた。

それ以来、自分を慕い、いつもついてきてくれた。

こんな自分を……。

アクアは自分が嫌いだつた、

生まれる前、母の胎内にいた頃、黒水晶の毒をつけ、そのため他のリスタル人とは違う、奇怪な容姿で生まれたのが嫌だつた。

そしてその毒の影響か、体内に宿したバケモノ級のバカデカイ水晶に、それにつりあわない、よわすぎる体。

そしてそれ以上に、弱すぎた心が……。

厳しすぎた父、ついていけない修行、優秀すぎた兄、周囲の自分を見る目・・・・

強くなれない心はどんどん傷ついていった。
一度も褒められたことはなかった。

いつも叱られてばかりだった。

ぶたれてばかりだった。

すべてが恐怖だと感じた幼いアクアの心は、逃げることだけを求めた。

だれもいない、古びた廃屋へと隠れ、父に見つかぬよつこと、びくびくしながら潜んでいた。
もう、十年も・・・。

やつと年齢が一桁になつたばかりのアクアは、その廃屋に立てこもるようになった。

そこでなにをするわけでもなく、三角座りで、小さくなつた体を抱えるように、父に見つからぬいよつてどびくびくしながら、息を潜めていた。

もともと細身だったその体は、この三日なにも口にしてなかつたらなのか、ますます細くなつていた。

アクアのなかでは空腹を満たすことよりも、父から逃れることのほうが重要だった。

いや、いつそのまま死んでもいいとさえ思つていた。

そんな時、ドアの向こうで物音がした。父かもしれない。心臓だけが激しく反応する中、激しい緊張感だけがアクアのリアルだった。

激しい恐怖感が襲つた、が、その物音の正体は幸運にも父ではなかつた。

「アクアぼつちやま、私です、ラズリです。」

「！」

声の主は、父に仕える聖獣ラピスの妻ラズリだった。

側に他のだれかがいるかもしれないと警戒して声を飲み込むアクアにラズリが話しかけた。

「安心してくださいな、私しかいませんから。」

「・・・・父さんに言われて、僕を連れ戻しにきたのか？」

震える声でラズリに訊ねるアクア、そんなアクアを不憫に思いながら、優しい口調でラズリは答える。

「いいえ、そうではなくて、お腹を空かしていると思って、食べ物を持ってきたんですよ。

なにも食べてないのではありませんか？
ダメですよ、大事な時期なんですから。」

「・・・・・」

ラズリの優しさに喉の奥が震えそうになりながらも、アクアは

「・・・ダメだよ、僕なんかより、子供にあげなきや。
まだ生まれたばかりだし、ラズリのほうこそ大事な時期だろ？
・・・早く、もどってあげなきや。」
「ありがとう、アクアぼっちゃんは本当に優しいお方。」

違う、ただの臆病者なんだ。

心の奥で、ラズリの言葉を否定するアクア。

「でも、ちゃんと食べてくれださいね。
また、様子を見にきますわ。」「・・・・・。」

ラズリが去った音を確認すると、アクアはそつとドアを開けた。ラズリが持ってきた食べ物を、頬張った。

ラズリの優しさに、お腹だけでなく、心も少し満たされた気がした。

それから毎日、ラズリはアクアのもとを訪れた。いつもドアごしでお互い顔を見ることはなかつたが、それがアクアのせいといった対応であり、ラズリもそれをわかつていた。

アクアは夜中にこつそりと外にでることがあつた。

そしてこつそりと寺院に忍び込み、書庫の古本をいろいろ読み漁つた。

アクアは基本的に体を動かすことより、本を読んだり、字を書いたり、とデスクワークが好きだった。

書庫で興味深い本を選んでは、内容を書き出し、自分なりにまとめてたくさんの書をこしらえた。

特にアクアが好んだのは、リスターの歴史と遺跡に関する謎など、水晶に関する謎にも興味があつたが、後ろめたい思いがあるのか、水晶使いというワードを目にするたび、心が痛んだ。

父から、水晶使いの修行から逃げてきたことが悪いことなのだとアクアは後ろめたく思つていたのだ。

だが、それに立ち向かう勇気は、なかつた。

いつものようにドアごしにラズリと語り合つアクア。寺院の書庫で得た知識をうれしそうに話すアクアにラズリがこつ話をした。

「アクアぼっちゃん、本を書かれたらどうですか？」

「本？！……でも、だれが見てくれるかな？……僕の書いた本なんて……。」

自分に自信のないアクアは頼りなげに答える。

「私は読んでみたいですね。せっかくの知識をいかさなくてはもつたまいでしよう?」

きつとアクアはちやまは水晶使いよりも、やつちのほうが向いているんじやないかしら?」

アクアに希望を持たせたいラズリはそつ答える。

「でも・・・水晶使いになれたら・・・どんなにいいだろ?・・・

そしたら少しばさんも許してくれるだろ?」

力なく、さびしげに言うアクアに、ラズリは優しく答えた。
「許すも何も、族長はアクアはちやまが思っているように恐ろしい方ではありませんよ。

ただ、子供の愛し方が不器用なだけなんですよ。」

「そりかな・・・? そんなの気休めでしか・・・」

父は自分を憎んでいるんじゃないのか?

・
母親の命を奪つてまで生まれたのが、こんな出来損ないの人間で・・・

アクアはそう思えてならなかつた。

「アクアはちやま、私、もうじき子供が生まれるんですよ。」

「え?」

「私、ここのにはちやまのような優しい心を持つた子に育つて

欲しいと思つて います。」

ふふ、と笑いながら言ひラズリに

「ダメだ！ こんな臆病者になっちゃう！」

必死で否定するアクア

「ぼっちゃん、臆病なのは悪いこととは思いませんわ。
強い者には持てない優しさを、ぼっちゃんは持っているんですから。
優しい心、だれかを思いやる気持ちは、私なによりの強さだと思つ
ているんですよ。

ねえ、ぼっちゃん、このこじが生まれたら、抱きにきてくれませんか？

お家に戻つて来いといつ意味ではありませんわ。このこじに会つてこき
てほしいんですね。」

「・・・・ラズリ。」

それが、ラズリとの最後の会話になつた。

一人目の子を生んだ後、黒水晶との戦いにおいて命を落とした。

それから一年後、アクアはそのラズリの子と出会つことになる。
ラズリゆずりの虎毛に、透き通つたスカイブルーの瞳。

疑つことなど知らず、真つ直ぐな瞳は、透明な心を象徴しているか
のような・・・・

それがマリンだつた。

マリンは、母とアクアの関係もやりとりも知らなかつた。

だが、他の聖獣たちが恐れるような、バケモノみたいな水晶に恐れることもなく、自分を慕つてついてきてくれた。

臆病だけど、真っ直ぐで、いつも自分を信じてくれた。優しい瞳が、アクアの脳裏に焼きついたままだつた。

アメジに連れられて、黒水晶と戦いに行つたマリン。

こんな自分のために、と勇氣をふりしぶつた幼い魂。

あの時のアメジの問いかけに迷いながらも、答えをだそうとしていた。

「マリン……」

今こそ、逃げ出さない勇気をアクアは手にじみつとしていた。

「マリンちゃん、まだ希望は残つてゐるわ。
おじい様がまだいたわ。」

果たしてそれは希望といえるのだらうか・・・?
アメジとサファとマリンはラルドのもとへと向かつた。

今日もそろそろ黒水晶がやつてくる時間となり、いつもの場所にラ
ルドはジスト、タルとともにいた。

アメジたちが来たときはまだ幸いにも黒水晶は来ていなかつた。

「ココヤ、遅いではないか!巫女がおら」とこなは話にならんじや
ろが、
まったく、ケガで休んでおつたからと、心までたるんではしようが
ないわ。」

「すみません、少し用事があつまして。」

「そりやう、大事な用事よ。」

開き直つてアメジ答える。

アメジに抱かれたままのマリンもみゅつ。と答える。
マリンに真つ先に気づいたタルが「あつ」と叫んだ。

「ちよつ、なんでマリンを連れてきたるか?!

もつじきあいつがここにやつてくるたるよー。」

ジストの足元で、ギャーギャー叫ぶタル。

「そう、でおじい様、このマリンちゃんとの水晶の相性を調べにきたんですよ。」

「なんじゃと？」のチビっこと・・・ワシが？」

「ええ、おじい様の聖獣はもう数十年前に亡くなつたのを最後に、おじい様はずつとおひとりでしょう。もし、マリンちゃんと相性が合えば、またおじい様だつて。」

「お前、このワシを戦わせるつもりかっ？！！」

なにを考えとる。そんなことをすれば・・・

アメジ殿がますますワシに惚れてしまつじゃろうがつー。

んなわけないだろ、ジジイ。

「サファ、ラルド様を戦わせるなんて、無茶を言つな。
私とタルがみんなの分まで戦う。

マリンも、下がらせるんだ。」

「ジスト様、あなたこそひとりで無茶しそぎです。

おじい様は年の割りに丈夫だから、少しくらい無茶をせても平気です。」

サファ、ちょっとラルドに酷い。だが、それもジストを想つからこそその発言であつて、けつしてラルドをどうでもこと興つてゐるわけではない。

サファは普段おとなしいわりに、こざとこう時頑固などいろもあり、言い出したらジストであろうと譲らないときがある。ジストもそれを知つているから、半分諦めたようなため息をついた。

タルだけは強く、反対たるーと主張していた。

「マリンちゃん」とラルじいか・・・

アメジはふたりが並んで戦っている姿を想像してみた・・・が。

「ふりてい」とジジイ（Hロ）・・・ああ、なんて絵にならない（泣）マリンちゃんの気持ちを叶えてやりたいと思ったアメジだったが、マリンの初主人となるのがラルドかもしれないと思うと、少し、いやかなり後悔した。

そんなこんなともめているうちに、あの黒く巨大な影が舞つて來た。

「みな、早く構えろ！奴が來た！」

ジストが黒水晶を睨みながら、みなに叫び、体制を整える。タルもすぐジストのもとに走り、戦いの精神に入る。

「アメジさん！」

「よっしゃ、いくよ。」

アメジ、マリンを降ろすとドクロ水晶を取り出し、走り出した。サファもアメジと打ち合わせをしたわけではないが、アメジとは逆方向へ向かい、ドクロ水晶を構え、集中を始めた。

巨大なバケモノを目の前にし、小さな体がガクガクと震えだしたマリンだったが、必死でそれを打ち消そうとし、体を真つ直ぐと伸ばし、振るえを止めようとした。

アクアのために黒水晶を倒したい、その気持ちだけは本当だつたらだ。

アメジは大地を激しく蹴り上げることで、走りながら、力強い光の

線を描いていった。

黒水晶が真っ先に動きの速いアメジヘと目標を定め、襲い掛かる。アメジはフットワークのよさで、巨大な黒水晶の体当たりな攻撃をかわしながら線を描き続けた。

アメジがおとりとなつているおかげで、サファはわりと安全に線を描いていた。

サファは流れるような動きで、舞台で舞つているようなステップで光の線を描いていく。

ジストもいつものように水晶をタルに込め、タルの戦闘能力を高めてやる。光の生物となつたタルは一人の巫女が描いた線をつぎつぎと駆けていき、黒水晶へとぶつかつていった。

ギヤアアアーーー、耳に障るあのキツイ鳴き声をあげながら、痛みに悶える黒水晶は、激しく暴れながら土壁にとぶつかつた。黒水晶の激しい羽ばたきに、タルははじかれ、土壁にと激しくぶつかって、大地に叩きつけられた。

「タル！」

すぐさまジストが駆けつけたが、ダメージをかなりうけたタルはしばらく動けなくなつていた。ジストが水晶を注ぎ込むが、回復にはしばらくかかるようだ。

「すまない、一人とも、少し時間をかせいでくれ。十分ほど・・・」「ええっ、ちょっと・・・アンタラが戦えない意味な・・・、おおつと。」

アメジ、黒水晶の体当たりをかわしつつ、そのまま線を描きづけ

た。

サファはラルドに声をかけながら、田をやつた。

「わわわ、ワシも数十年ぶりに、戦うことになれどやの。」

ふむ、ちと大神官の力でも見せ付けてやるとしようかの、ほれいくぞ、チビッコ。」

「みゆつ？」

ラルドにひょいと抱き上げられ、マリン一瞬縮こまつた。
ラルド、しわしわの手に水晶を集めだし、マリンの体へと注がうとした。

その直前にマリンは全身の毛をふわっと逆立て、ラルドから飛び降り、逃げ出した。

「ハニヤー。なにしとおじゆのオムツ」

「ダメでちゅー・マコンやつぱりダメでちゅーー。」

半泣きでラルドから逃げ出すマリン、それを追いかけるラルド。

「ちよつ・・・ラルジー? なにやつてんの? 一
マコンちゃんをこじめてんじゃないわよ。」

アメジとサファはラルドの様子を気にしながら、水晶を放出しつつ、黒水晶を翻弄する。

ジストは黒水晶から逃れつつ、タルの回復を図るが、まだかかりそ
うだ。

アメジ、希望をラルドへと向けるが・・・

泣いて逃げるマリンとそれを追いかけるラルド・・・ダメそつ。

「ラルじい————！！

ちよこまかと逃げ回るマリンを暗闇まで追い詰め、じりとにじり寄り、ついに捕まえたラルドは勝ち誇ったようににせり、といやらしく微笑んだ。その表情にがくがくと震えるマリン。

ラルドの手から放たれた水晶はマリンへと、

第17話

「……………」アクリアが、うなづいた。

マリンの悲痛な叫び声が響いた。
マリンの全細胞がラルドを拒絶していたのだ。

「観念するのじゃ、サビック！」めが・・・。

その手がマリンに触れた瞬間に、それを離る手がした。

「マリンに触るなー。」

マリンの耳がピンとなつた。

ラルドがその声のまゝかへと振り返った瞬間、マリンはその耳へと觸れた。そしてマリンの頭を優しく撫でていった。

「アクアちゃん。」

田に涙を浮かべながら觸れてこへマリン、アクアのマリンの頭を優しく撫でていった。

「なんじや、小僧。」

ラルド、ムツとした顔でアクアを見る。

「あつ、あいつー！」

「あ、もしかして・・・あの人人が？」

アメジさん、やつぱり連れてきてくれたんですね。」

アクアに気づいたアメジとサファは線を描きつつ、アクアのほうへと皿をやつた。

「！？・・・まさか・・・彼は・・・。」

アクアに気づいたジストも、十年ぶりに皿にする弟にじばらへ皿を奪われた。

「アクアちゃん！」

「マリンは・・・

マリンのまちゅたーは、やつぱりアクアがやまちかいないでちゅ！

マリン・・・アクアちゃんといこっちよ

たたかいたいでちゅーーー！」

さつきまでのおびえた表情と一緒に、凛とした顔でアクアを見上げた

マリン。

アクアを見つめる真っ直ぐな、スカイブルーの瞳にアクアの心が激しく揺れた。

「マリン・・・あんなバケモノにぶつかっていくの怖くないのか？」

まばたきすら忘れている力強いその瞳を見つめながらアクアは問いかけた。

「アクアちゃんまこっちゃんなら……
マリン……こわくないですかよー。」

太陽にあらはりと照られた青空色のその瞳にアクアは勇気をもひつた。
もう一度マリンの頭を撫でた後、すぐと立ち上がり

「じゃ、マリン……こべれ。」

アクアの答えにマリンの瞳ははつらしあつに輝いた。

「はいできゅー。」

アクアは集中する。

激しく暴れそくなびくじゆうもない自分のその水晶を、なんとか上手く流そうと、呼吸を整えながら、集中する。

じつとアクアの水晶を待つマリン、幼いながら戦う獣の目をしていた。

喉の奥が千切れそうになら、なんとか右手へと水晶を集め始めたアクア、あと少し、そう思った瞬間集まつた水晶が逆流を始め、それに耐え切れない弱い体が呻いた。

「アクアちゃんー。」

その場に膝を着いたアクアに、マリンが駆け寄りついたが、アクアはそれを止めた。

「すまないマリン、久々に水晶を使ったから、体がびくびくしただ

けだ。」

ハアハア、途切れそうな息を吐き入れぬよつと、深呼吸し、呼吸を整える。

ムダなドキドキを押さえたい。

ここには、自分を怒鳴りつける父はない。

マリンが待っている。

落ち着け

少しだけ、水晶を・・・ここに集める！

アクアは手のひらに一握り分の水晶を集めた。

「ー・よし、マリン！」

その水晶をマリンへと向けて放った。

「はいでちゅ！アクアちゃん。」

アクアの水晶を受けたマリンはタルのような輝ける聖獣となり、アメジたちの描いた光の道を駆け出した。
その様子を見ていたラルドはぽかーんとなっていたが、アメジは軽くガツツポーズ

「あいつ、やるじゃないかー。」

タルへと水晶を注ぎ続けるジストは

「・・・やつぱり、アクア・・・なのか？」

まだ半分信じられない目でアクアを見ていた。

小さな体ながら光の生物兵器と化したマリン、光の道を駆けながら

黒水晶へと到達。

激しくぶつかった。

「マリンがぶつかると体をねじらせ、翼を激しく羽ばたかせマリンを
払おうとした黒水晶だったが、一撃打えたマリンはすぐさまアクア
のもとへと駆けてもどった。

「アクアちゃん！ いけるでちゅよ！」

初めての攻撃が上手くいった喜びで嬉しそうなマリン。

そんなマリンの気持ちに応えられてうれしいアクアだったが、

「なにをしとるか、はよせんか！！ 次がくるぞ！」

気がつけば、いつもの安全地帯に避難済みのラルドが岩から顔をの
ぞかせながら叫んだ。

「アクアちゃん、おねがいちまちゅ。」

アクアを信頼しきっているマリン。すぐに、とアクアの水晶を待つ。
アクアはマリンの期待に応えようと、再び水晶を集めだすが

、「ギャアアアアアー————！」

黒水晶のあの声に集中を乱された。

「ー・づひ、くづひーー！」

暴れるように放出されたアクアの水晶は、その手に集まることなく、
大地の中へと吸収されていった。

肌の奥が燃えるように熱く、軽く火傷を負ったような感触を受け、
地面へとへたり込んだ。また呼吸が乱れる。

「アクアちゃん！ 「ギャアアアアー————！」

マリンの声が、あの声にかき消される。

ダメだ・・・やつぱり俺は・・・

現実から、遠ざかりそうになるアクアの意識・・・

それを戻したのは

「…？」

地面が離れたのにアクアは驚いた。立ち上がってはいない。

「なにやつてんの？ほら水晶集めて！
マリンちゃん待っているでしょ！」
自分は抱え起された、アメジに。

「お前・・・」

「あたしが支えてあげるから、アンタは水晶集めることに集中して
な、

黒水晶の動きは見ててあげるから。」

アメジ横目でにっ、とマリンに微笑む。

アクアは隣のアメジに呼吸の乱れを悟られまいと、顔を背ける。

「フン、俺はな・・・田で見なくとも、あいつの動きは感じ取れる
んだよ・・・。」

「よく言つよ、足がくがくじやん。」

アメジ、自分の膝でアクアの膝をついた。
うあつ、とおもわずよろけたアクアに、にししと笑った。

「くっ、なにす・・・」

「いーから、集中始めて!」

キツ、とマジメな顔のアメジに、アクアは黙つて集中を始めた。

アメジがアクアを支えている間、サファアがひとりで光の線を描き続ける。

ジストはアクアたちのほうを気にしながらも、タルの回復を続ける。

そしてラルドはアメジたちの後ろから、

「アメジ殿! ワシ以外の男とそんな密着してはなりませんぞ! ! !

「ラルじいうっさい! ! !

やーやー言つていた。

「くつ」

また水晶を上手く集められず、アクアの水晶はムダに放出された。特にアクアは黒水晶の毒によつて、生まれつきバカデカイ水晶を体内に持つており、それだけに水晶のコントロールが難しかつた。

なかなか思うように手に集まらなかつた。

そのたびに体力を消耗した。元々体力のないアクアの息はかなりあがつていた。

失敗、そのたびに何度も父に叱られた。今もまだ、あのころの幼い傷跡のまま。

きっと刺し殺すよつた視線・・・アクアの弱い心、恐怖心がまたア

クアの口を止めたとした。

「どうしたの？もう限界？」

「へへ、うるせー……お前に俺の辛さ……なんか……」

息きれながらも、隣のアメジを睨む。

「マリンちゃん、あんな小さな体でこんなバケモノにぶつかっていいんだよ。アンタにそんな勇気ある？」「

「・・・・・ハア・・・ハア。」

アメジから目を逸らし、息の乱れをコヤシトするようにシバを飲み込むアクア。

そして、マリンへと手をやつた。

真っ直ぐな目で、アクアを待つマリン。

「マリンちゃんは、ほとんとアンタのこと、信じてこるんだね。

だから、あたしも、

少しだけアンタの」と言じてみると。

「あ、あきりみんな、マリンちゃんの気持ちに応えてあげて。

「・・・お前・・・」

「今はケツ蹴られたことも忘れてやるから。

「いく。」

震える口元を見られまいと、アメジから顔を背けたアクアは、再び水晶を集めだした。

血管が切れそうなほど赤らんだ体を押さえながら、水晶を手のひらに集めた。

キッと耳を天へと立てたマリンに向けて、集めたそれを放つた。マリンはサファの描いた線に乗つて、黒水晶へと走った。

アクアからの水晶を得たマリンは再び光りながら天を駆け上っていく。

凄まじい速さで黒水晶といつも標に到達し、激しくぶつかった。

「……？」

その衝撃に身をよじりながら黒水晶

ジタバタと羽ばたきながら、自分へとぶつかってきたそれを睨むかのような表情で向きかえった。

一撃を与えたマリンは、ぐるっと向きを変えた後、素早くアクアのもとへと戻ってきた。

「アクアちゃんまー！」

「マリン・・・」

「でかしたマリンちゃんー！」

アメジたちがマリンを褒める間もなく、黒水晶がこちらへと襲い掛かってきた。

「マリンー！」

反射的にアクアはマリンを胸元へと抱き寄せ、アメジはそのアクアを脇に抱えたまま、横飛びして、黒水晶の体当たりをかわした。

地面すれすれまで顔を近づけた黒水晶は攻撃をかわされたことを気にする様子もなく、地面をガツと蹴り上げ、砂煙を上げながら、再び舞い上がった、そして再びギャアアと鳴いた。

「いくでぢゅ！」

戦いのリズムが刻まれてきたマリンは再び黒水晶へと向かうチャンスを待っていた。

耳をぴんと立て、アクアの指示を待っていた。アクアもまたそれを感じ取っていた。お互い目で合図が送れるほどに、お互いを感じあつていた。

アメジはアクアの横で小さく「もう一度。」と言つた。

アクアはそれにこくりと小さく頷くと、水晶を集めマリンへと放つ。

ジストの膝上で氣を失っていたタルの体がかすかに動いた。

「ん・・」

「！タル・・気づいたか？」
パートナーの目覚めに気づいたジストは水晶を送るのを止め、タルの右頬を親指でそつと撫でた。

「ジスト、もう大丈夫たる・・・！？」

アレは・・・誰たるか？！」

タルは黒水晶へと向かっていくその聖獸を目にして、目が点になつた。まさか・・・

「マリン？」

信じられないといった表情でその姿を見ていた。

戦っている妹の姿みてふるふると体を震わせながら、ジストに

「ジスト行くたる！」

マリンにばかり危険なめに合わせられないたるー」

ジストの膝からぴょんと飛び降りると、全足をぴんと立ち上げ、ジストを呼んだタルは戦士のオーラを放っていた。

「ああ。」

タルのその姿に共感し、ジストも再び戦闘モードに突入する。

サファアが描いた光の線を駆ける「一体の聖獣」。

マリンが駆ける後を、タルが駆ける。

はげしくぶつかる二つの光に、ドンと吹き飛ばされ、

強いダメージをその体に刻まれた黒水晶。

またギヤアアと千切れそうな鳴き声を上げた後、山脈の向こうへと消えていった。

大地には黒水晶が落とした血痕が点々と残った。

一仕事終えたサファアはふうーと息をつきながらその場へと座り込んだ。

タルはすぐさまマリンのもとへと走った

妹のことが心配だったし、いろいろ言いたいことがあつたし、しかつてやりたかったのだが・・・

「ひらひら待つたるマリンー！」

マリンは真っ直ぐにアクアのもとへと走って行つた。

無茶して姉の気持ちも知らないでとぶりぶりするタル、自分より真

つ先にアクアのもとへと向かわれた。嫉妬心が混じったような複雑な気持ちでその後姿にふりふりしていた。

そのタルの隣で、十年ぶりに田にする弟を不思議な気持ちで見つめていたジストがいた。

ジストは弟にかける第一声をずっと考えていた。

先ほどの戦いぶりを褒めてやるのが先か、

今までなにもしてやれなかつたことを謝るのが先か……と。

「アクアちゃんまーやつたでちゅよ！
マリンたち、くわつこじょしおこぱぱうつたでちゅー！」

まん丸な瞳でうれしさが零れそつなマリンがアクアに話しかける。
そんなマリンを「よくやつた。」と褒めて撫でてやりたかったアク
アだつたが、
体がそれすらも許してくれないほど疲労していた。
自分を抱えるアメジに体を預ける様に、アクアは田を閉じた。

「ーーアクアちゃんまー？」

心配するマリンに安心するようアメジが言つた。

「大丈夫よ、疲れているだけだから。」
アメジにこくと頷いたマリンは一言

「おつかれちゃ までちゅ。」

と言つてぷりぷりと自分を見ているタルへと向き直つた。

もつ自分は一人前だから心配いらない、といつ態度をタルへと見せた。

「マリンー、やつぱりお前は戦いなんてダメたるよ！」

今回成功したからって調子に乗っちゃダメたるー！」

ぷりぷりするタルを落ち着かすようジストが言った。

「まあ落ち着けタル。

今回マリンと・・・アクアのおかげで助けられたんだ。

な。」

「・・・せうたるナビ。」

認めてやりたい、でもしたくないそれを邪魔する姉心であった。

アメジはアクアを抱えたまま、その場へと座り込んだ。

そして口を開じたまままだ少し息が乱れたままのアクアへと口をやつた。

「アンタもなかなかやるじやん。少し見直したよ。」

アクアをムカツクかわいくない奴だと思つていたアメジだったが、この戦いの中でアクアに対する想いが少し変わった。

ひねくれものでやな奴だけど、マリンちゃんへの想いは絶対なんだな。

「ん? なに・・・

アメジの膝の上でかすかな声が発した一言

「・・・あり・・・がとう。」

そつづぶやいた後、アクアの意識は遠のいていった。

アメジの後ろから

「アメジ殿——、ワシにも膝枕を——」

といつラルドの声がしていたが無視した。

アメジはなんだこいつーと言いながらアクアの頭をぐしゃぐしゃしていった。

アクアの中に発生したある感情に気づくはずもなく、アメジは黒水晶を倒した後のアメジ感謝祭に胸を躍らせていたのだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4310z/>

アメジスト

2011年12月26日22時46分発行